特10
398
No 17521/2

銀鈔

浪華

妖怪の風説

宇田川文海著

第一回

今を距ること二十餘年の昔或る夏の薄暮甲斐國巨摩郡牛田村の村稍盡處なる路邊の掛茶店の床几に腰うち掛け一個は年齢四十餘名を六兵衛と呼れ一個は年齢三十不足名を八五郎と呼る丶二個の男手織木綿の單物に糊半草鞋掛け孰れも輕便と一た旅裝にて茶店の娘お吉が汲で出す番茶に咽の渇きを濕ー潤團扇に風を納て談話ーてゐる處へ是も同じく旅裝にて年齢五十前後其名を甚七と呼る丶男が菅笠を片手に提げて入來りーが互ひに此村の農民にて常より恐意き交情と見えて其男は以前の二個に向ひて野郎聲高く

甚七「ヲ丶六兵衛どんに八五郎どんお揃で何處へ行た歸りだ

六兵衛と八五郎も笑ひかけ

六兵「ヤア甚七どん今江戸から歸りか割に早かつたのう

八五「無事に歸ッて何寄だおよねさんが毎日首を延ーて待てゐるから早く歸つて遣れば好いに

甚七「余も一刻も早く彼に顔が見せて遣りたいが貴樣等の顔が見えて然も何彼面白さうに話ーてゐるのでッイ寄りたく成て夫にお吉ッさんの美くーい顔も見たー咽か渴いて茶も飲みたーア

ハ、、、、お吉ッさん相不變繁昌で……

茶店の娘ば茶を汲で來り

お吉「オホ、、、、甚七さんが不相變お世辭の好い事許り……お

よねさんに顔が見せたいのと咽が眞實で迹は皆ナ虛僞でせう

八五「其事々々歸り早々慌惚を言ふなんテ餘り强い

甚七「强いと云へば此の二三日の熱サ道中で燒け死ぬかと思ッた

六兵「けれども作物の爲めには結搆な日和だから熱い位耐忍せにゃならぬ

甚七「時に貴樣等は……

六兵「吾等は靑柳の不動樣へ護摩を上げに行た歸りだ

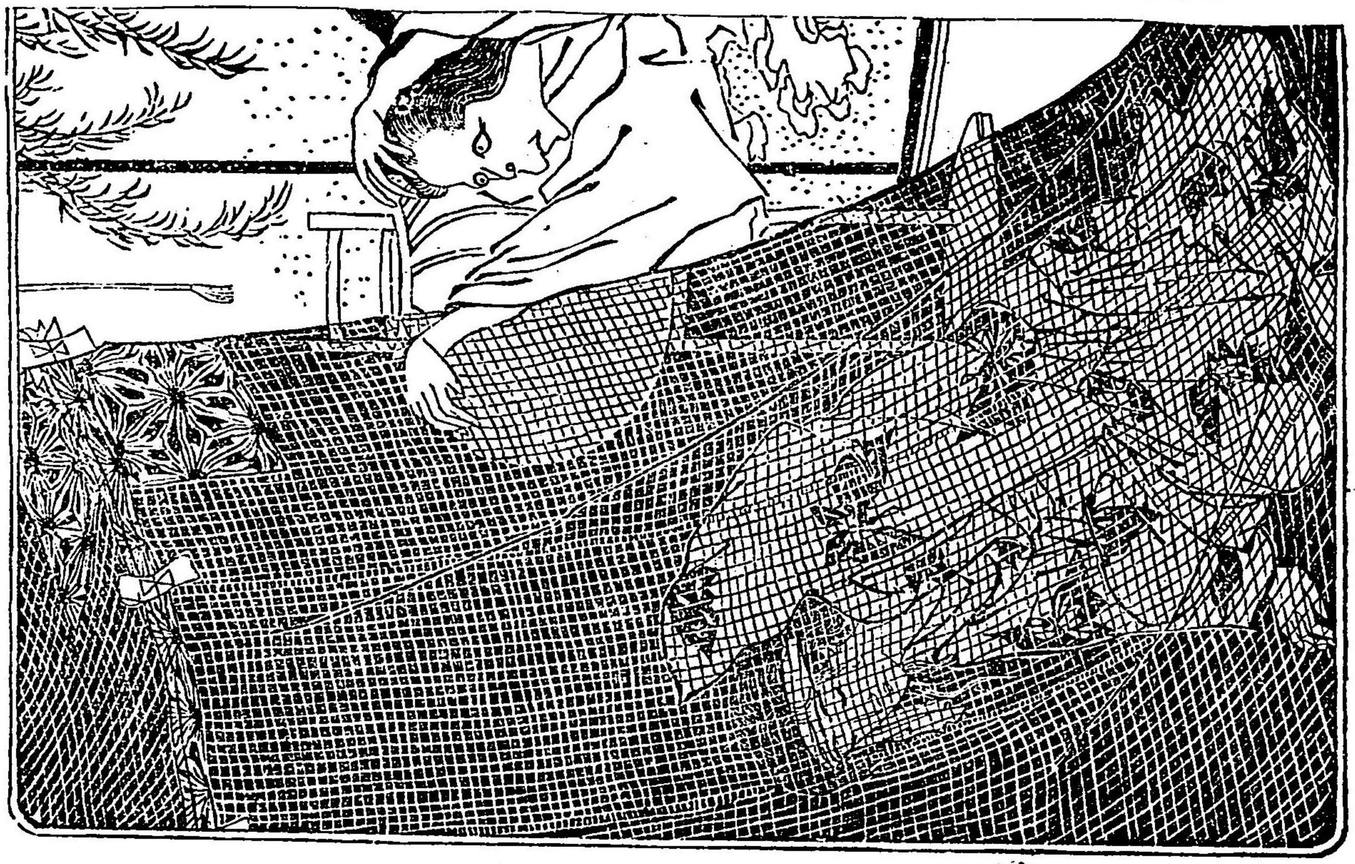
甚七「ナニ護摩を……フーン何で……オヤ貴樣の顏は如何ーたのだ寶永山が噴出ーてゐるでは無いか、又例の犬も喰ない喧嘩をーたのか見ッとも無い好い年からげて、モウ大体にせへ

六兵「違う〳〵此の寶永山、イヤ此の痴は其樣な氣樂な事で造へたのでは無い

八五「六兵衛どんの痴も護摩上げに行ッたのも著ナ大庄屋樣の一件に就いての事ぢや

甚七「ナニ大庄屋樣の一件とは

六兵「貴樣大庄屋樣の一件を知らンのかオ、成程今江戸から歸つて



來たのだッけ……アノ評判娘のお嬢樣が……

甚七「エ、夫ではお年樣でも……

お吉「お婿樣處か內の長太などは晝夜詰切といふ大騷ぎですよ

甚七「ヂャア万一氣でもお狂ひ爲すつたのか

お吉「六兵衞さんお前さん癇の所以と一緒にお嬢さんの一件を甚七さんに……

六兵「話すのも好いが薄暮に氣味が惡いなア八五郎さん元來マアアノお嬢さんの病氣は何だらう

八五「サア何でも平事では無いのう

お吉「お可愛相にモウお煩ひかけから半月の餘にも成るだらう

六兵「最初田淵先生にお掛りなすつたら感冒の變症だといふことで有たが何分例の深更になると……アノ思ひ出しても慄然とする妙法蓮華經々々々々々々

お吉「此頃では只さへお美しいのが透き徹る程お色がお白く成て只さへお尋常なのが糸のやうに手足がお痩成すつて夫でお氣が確かで恰是で絵に畫いた幽靈のやうで

甚七「夫ばはヤお氣の毒な事だ

お吉「六兵衞さん妾の考へではお嬢さんはアノ通り御姿色好しだから万一蛇でも魅れたのではあるまいか左も無れば狐か狸でも附いたのかと思ふよ爾で無れば毎晩時を限つてアンナ……オヽ怖いことノ〳〵

八五「今お吉ッさんの云た物の祟りとか罪の報ひとかいふ事は世間に好くある話だが夫は大概親が殺生が好きだとか無慈悲な人だとかで其罰が其子に報ふとかいふ事だのにアノ大庄屋樣は代々御慈悲深ねお家で殊に今の旦那樣などは活佛だ鎭守樣だと村中の者に尊仰れて入ッしやる程な結構なお方夫にお嬢樣

も大の親孝行でアレガ若水飲百性の娘なら疾うに御褒賞が下るだらうと云はれる位近郷近在まで評判なお方物の祟りや罪の報ひの有う筈は無いが……然ーあればこそ六兵衛さんの痴に額がイヤ額に痴が出來たといふもの吾シャとんと合點が行ぬて

甚七「シテお醫者は、ヤハリ田淵先生かナ

六兵「如何ーて〳〵田淵先生は疾うに匙を投げて仕舞ッて今日でハソレ江戸から甲府の青沼に來てござる……エヽ何とか……

甚七「オヽ片桐玄達先生アノお方が療治ーてじや

六兵「アノお方なら以前はお匙とか御殿醫とかで長棒の駕籠に乘て四枚肩で歩いた先生だといふから確かなものだらうソシテ御診斷は

六兵「エヽ何とか……オヽソレ〳〵陰症の羊羹イヤ傷寒から瓢簞

をイヤ違ッた勞咳とかを惹き出ーた名もむづかーいが症もむづかーい病氣ださうだ

甚七「お藥は上りますか

八五「お藥は勿論……加持祈禱呪咀何でも好いといふ事は金にも人にもわかーて爲されるが一條も効驗が無ッてお孃さんは日に增ー病が重る計り

甚七「シテ六兵衛さんの額の痴は

六兵「イヤ是は面目無いが昨夕お伽に行てをつた處が例のドロ〳〵の時刻になると天井で鼠めがガタ〳〵とやらかーたのでソレと言つて逃る機會に疊の緣に躓いて俯首に轉倒ンで敷居でゴツンとやッた其結果なので……

甚七「前刻から例の時刻だのドロ〳〵だのと云ふがヂヤアお孃さんの御寢間へ何か……

「確かに見認た者は無いが人の噂では畫間の内は何事も無いが毎晩夜半ごろに成りアノ藪際の大乘院の竹垣に附いて曲る處の小川の水の流れる音が潺湲と高く聞えて時々水車の溜水が車の輪を傳ってポトンと落る聲が幽かに響いて世間は寂寥として何と無く物凄く成て夜風が庭の松の枝と草の葉にサーアサット當って丑刻の鐘がボーンと鳴るを相圖に一眼小僧大入道轆轤首あらゆる妖怪變化が何處から這入るかお嬢さんの臥間へ一齊にカウーと話しかける折から晩風が軒の繩簾を吹いてその先が六兵衛の首筋元へサラリと當れば六兵衛は思はず飛上ってキャアー

第二回

散歩

松吹く風の音は颯々として無絃の琴を調べ岩に堰る水の聲は琅々として無孔の笛を弄ぶ明月は彷徨ふ人の如く樹を出るかと見れば又樹に入り流螢は隱見する鬼に似て草を離るゝかと思へば忽ち草に藏る夏尙淺きに白露點々早く鮫人の涙を綴り秋未至らざるに陰虫切々既に騷客の吟を催す道は是甲斐國巨摩郡牛田村を三四町東に距りたる字落葉山と唱ふる小山の半腹の夏夜の景況なり此る處へ涼を逐ひ月に浮れてか身には白地の浴衣を被り腰に長やかなる一刀を佩び右手に團扇を携へて蚓の巣を拂ひ左手に衣裾を揭げて露を厭ひつゝ頂上を目懸けて攀躋る一個の壯士あり夜目にて確定ならねど年齡少く容貌清らかに標致優に見えて由緒ある人と思はるゝが一酌の酒の醉心地にや土地からとて胸に浮びたるか姨捨の謠曲を聲さへ節も面白く獨吟せり(謠)夕かげ過る月影の〳〵早出初めて面白や万里の空も隈無くて何處の秋も隔て無き心も澄て通宵三五夜中の新月の色二千里の外古人の心此く謠ひさーて歩みを停め木の間漏る月の光りに此處彼處の景色を眺望つゝ

「光源氏の君は人に違ひて冬の夜の月を愛で給ひしと昔物語に見えたが楓に樫に此う新緑の繁茂つた木立の間を漏れる夏の夜の月の景色も又一入の眺望めだと言ひつゝ歩みを進め又も聲張上て(謠)面白の折からやなアラ面白の折からや明ば又秋の半も過ぬべし〜今宵の月の惜きのみかはさなきだに秋待兼てたぐひ無き名をもち月の見〜だにも覺えぬ程に隈も無き姨棄山の秋の月餘りに耐ぬ心とや昔とだにも思はぬぞや又も歩みを停めて

「然ー此の山の名を落葉と云ふからは樹々の木の葉の落盡ーた秋の月は又格別の絶景なので夫で故人が如此いふ山の名を附けたのかも知れん秋まで此村に居たら又來て實況を試ーて見やうアゝイヤ〜今謠ッた姨棄山の姨同樣然う何日までも如此な山家へ捨て置れては迚も命が續かん罪無くーて配所の月が見たいと願ッた顯基の中納言の物數奇とは理が違ッて此方は大星の山科の閑居では無いが風雅でも無く洒落でも無く所爲なーの幽柵と來てゐるのだからアハゝゝゝゝ誰も聞人の無い此處へ來て月に對つて愚痴を云ふ事も無いが……

(謠)盛りふけたる女郎花の草衣ーぼたれて又姨棄の山に出で面を更科の月にみもるも耻かーやよしや何事も夢の世の中々言はじや思ひ草花にめで月にそみて遊ばん實や興に引れて來り興盡て歸りーも今のをりからと知られたる今宵の空の氣色かな、夜の涼ーさと、月の明さに興に乘じて、吾を忘れ、謠ひつ、歩みつ、獨見つゝ那の壯士は漸々山の頂上近く躋りーがゝト見れば彼方に一軒の家の如もの眞黑にぞ見えにける壯士は尙も進みて月明りに透ーー見れば、正ーく家に紛れ無れば小首を傾けつゝ、此んな山の奥に住居をーてゐるのは、獵夫か、樵夫か、但は法師か何にーろ家があるから人が住で居るに違ひ無い、若獵夫か樵夫なら

ば、山中の話をさせて聞ふ、若法師ならば詩か歌か何そ風流な話でも、て樂ふ、岩端や此處にも獨り月の客、アヽ面白い〳〵と獨り興に入りつヽ、愈々歩みを早めて其家に近よれば、小やかなる門の關〳〵てありて、然も柱傾き瓦落て、今にも頽環なん狀況なれど、正面に掲げたる扁額は尚依然にて、塗りたる白聖の未剝ねば、不識庵と筆太に書せる三ッの文字は、ヤヽ鮮やかに讀れたり

一過日菩提所の甕源寺に參詣した時に方丈の文則和尚が、梁の武帝が達磨大師に朕に對する者は誰ぞと問ふたらば達磨は不識と答へたと話したが、此の額に不識庵と書いてあるからは、禪僧の庵室に相違無い此の頽廢の樣子では無住に成てゐるかも知れんが、兎も角も音問ふて見やうと卽て小門の方へ身を寄せて二ッ三ッ敲けども只韻に響くのみ、何の返答も無れば若やと惚身の力を兩の手に入れて、ウンと許りに推し試みしが、内より鎖せるのみ、懸金も貫木も穿めて無かりけん、ギーと聲して開きけりそのまヽ、身を容れて見れば草深一丈法堂秋と吟じたる、某禪師の住居かと怪まるヽ許り道も無きまで荒果てたる叢の中に一宇の草堂あり、思ひし如く堂守りの僧さへ居らぬと見えて四面の雨戸も開放したるまヽにて、燈火の光りも見えねば履を穿てるまヽ、堂の樣側に登り、さし入るヽ月の光りを燈火にして堂内を窺ひ見れば、此處なん本堂と覺しくて、正面に須彌壇を搆へて、釋迦の坐像を安置してあり、前には一脚の机を置きて、經卷と小さき鈴を据たるが、夜目も忍る夫と判らねども、若畫ならば、經卷は燕子の糞に汚れ、鈴は蜘の蛛の巣に綴られ、其處等一面に鼠の足跡を印す可く思はる、然りながら此の模樣に依れば、無住に成て後、爾までの月日を經しものにも有らざるべしと、心の中に推しつヽ、既に立去らんとせしが、尚飲みたる酒の酔も浮るヽ心

の興も、共に醒めやらねば、折角足を入れたる甲斐に、廣くもあらぬ庵室なれば、方丈庫裡までも一覽して、歸りて宿の者へ談話の土産にせんものと、物數奇の念彌増して、尚も月を便りに奥深く進み入れば、方丈かと思はるゝ一室の内に、幽に人の呼吸するが如き聲の聞ゆれば、思はずも佇立りて、此く物冷まじきまで荒果たる庵室に人の住むべき筈の無ければ呼吸の聞ゆる理も無し、サテハ吾心の迷ひかと尚も耳を傾くれば、咳き入るやうなる音さへ聞ゆるにぞ、吾知らず悚然とせしが、元來弓馬の家に生れし身の、武藝に長じ、膽力にも富たれば、屹度勇氣を回復し、此く無住の庵室と、成しを幸ひ、盗賊どもの住居を爲るにぞ、圖らず此處に來合せしを幸ひ、一臂の力を費して曲者を捕へ村民の爲めに患害を除いてくれんと早くも思案を定めて、さて足、ぬき足、息を凝して彼方へ進近づくトタン、暗き中より、蚊の鳴く許りの聲し

「誰ぢや其處へ來るのは何者ぢや」

と思ひ懸けず言を懸けられて、再度吃驚き宛然暗夜に銃砲にて、不意に狙撃されたる心地して、又も歩みを停め、彼方をヂッと透し見れば此處も隈無き月のさし入るにぞ一室の一偶に人の臥したる如き姿の朦朧ながら目に映りぬ、始め想像たる山賊の輩なれば、人の足音を聞きながら沈着て寐て居る可くもあらず、サテは疾病に惱みたる旅人の此に一夜の宿を取りたるならんか、イナ此處は往還を離れたる小山の奥なるに故意に人の立寄る可くもあらず、畢竟是何者ぞと暫時思案に惱みしが、妖怪變化さへあるを、今の語音の調子い枯瘦たれども正しく人間に紛れ無し、彼奴何程の事かあらん、イデ正体を見屆くれんと、更に心を奮起し、此度は滿身に力を入れ、板敷荒く蹈鳴して、濶歩に進み近附けば、此勢に恐れしか、臥したる人い漸くに身を起して、此方に向ひ、細やかなる聲に力を入れて

「人の眠藏へ案内も請はず、然も履穿きのまゝで失禮な、何者ぢや」と再度言を發して誰何けり、此時壯士は最早咫尺の距離まで進み近づきければ心臟の動氣を鎭靜め心と共に眸子を定めつゝ、鮮明なる月光に照して、其人の形容を屹度熟視れば、頭の髮は長く延び顋の髭は斑に生え、眼凹み、頰骨出で、顏色蒼白く、身体枯瘦れたれば、年齡は確實ならねど、尙二十を多くは越さじと見うけらるゝ一個の男、汚れ垢づきて、鐵色になりたる白木綿の單衣を着て、白き帶をしどけ無く結び、數へらるゝ許りの肋骨を顯はし、糸より細き兩の手を立たる膝に置き薄き蒲團の上に起坐り、凄き眼にて此方をヂッとうち見たる、彼の項斯が不言身後事、猶坐病中禪と詠じたる病僧とは思はれども、某禪師が皮膚俱脫落只有一眞實と吟じたる骸骨に近く、演劇に扮する墮落の僧、清水清玄が櫻姫の畫像に向ひて呻吟する趣きあり、尋常一樣の男子なりせば、此の異樣なる姿を見て、如何許りか駭く可きを前回にも述たる如く膽力人に勝れたる壯士なれば更は阿容たる樣子も無く、卽て履脫却て徐に進み寄り、手に持てる團扇にて、其處等に堆きまで積りたる塵埃を拂ひて緩やかに坐を占め、病僧の顏を尙も熟視て

壯士「貴僧は此庵室の御主人ですか

病僧も凹みたる眼にて壯士の容貌を見やり、其人品の高尙に稍安堵たる者の如く、結び〳〵口を僅かに開き、力無き聲にて

病僧「然樣です

壯士「御病氣の御樣子ですが、御容体は

病僧は只俯着きて返答無〳〵、壯士は尙も言を繼ぎ

壯士「他に御看病申す人も無いやうですが、全く御一人ですか

病僧は僅に點頭のみ

壯士「此う伺つた所では格外御重症の御容体だが御看病人が無くて

はサゾ御不自由でせう、ソシテ、醫者は……

病僧は頭を横に掉る

壯士「御食事は……

病僧は同じく頭を横に掉れり

壯士「デハ醫者にもお懸り無く食事も召上らんとは、如何い

病僧は左も懶うげなる聲にて

病僧「ハイ

壯士「是程の御病氣に醫にもお懸り無く食事も召上らんとは、如何いふ思召しです

病僧は又伏むいて答へず、壯士は尙も膝を進めて

壯士「此樣な事を申すは、釋迦に向つて法を說くの諺に似て失禮でもあり且は唐突ぎた次第ですが拙者は祖先以來禪宗で、殊に父なる者は禪學を好で、時々菩提所へ參り、住持の某禪師に參禪いたす事が有つて偶には拙者も其伴をさせられ、住持と吾父の法話

を傍聞して、門前の小僧の習はぬ經を讀む格で、聊か悟道の一端をも承はつてをりますので、只今當御庵室へ這入かけに、御門に掲げたお額面の文字、不識の二字を拜見して、宗門の禪である事を知り、且は貴僧の禪僧でおはす事をも推察いたしたから、試にお尋ね申すが、是非共に念に懸ず生死兩ら機を忘るゝが、禪僧の常とは申しながら、貴僧は猶春秋に富で、此う視察つた處では、世尊が成道正覺を得たまひし年には未餘程間のあるやうにて此く云ふ拙者と難兄難弟の年齡とお見受け申され謂はゝ御修行盛りの御身分、今から不立文字敎外別傳の微妙の法門を究めて梁となり舟と成て、衆生を濟度爲さらなければならんではありませんか、夫に此程の御大病に、醫者にも懸らず、食事も喫らず、徒に入涅槃を待てゐられるは、貴重な法身を疎かに〳〵折角出家を遂げ玉ふ難有い志を無にする道理ではありませんか然〳〵夫と

も他に何か悟道の上に就て、深い所思でもあるのですか凡俗無智の拙者には、如何も合點が參りません若し深遠な禪味の有る事なら、亟示して迷ひをお開き下さいと思ひ入て問ひ懇くれば

病僧は重げに頭を擡げ

病僧「イヤ拙僧は病氣では有りません少し……少し仔細が有て斷食をしてをるのですと漸くにして答ふれば壯士は愈々不審氣に

壯士「ナニ、貴僧にい斷食を……アノ斷食を……トハ又何故有て如何いふ理由でと言遽しく問掛けたり、庵主の病僧は壯士の語を聞けども、更に聞かざるもの、如く默然として居たりしが、やゝ有て細き手を擧げて左右に打振り

病僧「拙僧が斷食を致すは拙僧の心に望み有ての事、貴殿にお話申し難き處が、何の益も無れば、由無き事をお尋ねなされずに早く麓へお下りなさい

と最も無情く言放ちて、吾が病中の禪をな妨げりと言はぬ許りに眼を閉ぢ口を締びて再び定に入りけり怖き物は見たく隱す事は聞きたきは人情の常なれば壯士は庵主が無情き答に、却て物數奇の心を募らし如何にもして庵主が斷食の因緣を聞得んものと思ひければ、そのまゝ庭に下立て、落散りたる松の實松の枝など拾ひ來りて、破れたる瓦の上に積重ね、烟草を薰らす爲めの料に豫て用意して來りたる火打とりだし火を燈りて之に點し當座の蚊遣と爲しつゝ携へたる團扇もて烟を四方にあふぎ散し、偶々健かなる人の臭と芳しき酒の香を聞きて鼻を作りて襲ひ來る數万の蚊軍を八方に驅逐ひ、庵主と自己の談話安を妨害ぐる障礙物を除き、卽て腰なる烟草袋と烟管を把出して一二喫續けさまに烟草を薰らし、再度庵主に對ひて慇懃に

壯士「只今は凡俗無智の身を以て大悟徹底の貴僧に對し御意見がまし事を申上げ、漫りに虎鬚を撫で奉り一段、甚以て恐入ました

が、一樹の陰に宿り、一河の流れを汲むも、他生の因縁とか承まはるを況〜て此く無端も、御庵室に推参〜て親〜く法容を拜〜参らするは、共に是靈山會上の人にては無きかと、昔の世をさへ知らま欲〜う思ふまで、不思議の値遇に感じまいらする程なれば如何に御叱責を蒙るとも、イナ、縱令三十棒を賜はるとも、此儘空〜く立歸る次第にはまゐりません、斷食を〜てまでも、望を遂げやうと思〜めさるゝは如何樣な大事因縁の在す事か、世俗の諺にも膝とも、談合と云へば万望拙者に其一端なりとも、お洩〜下さるやう

と言を改めて懇望せ〜が、庵主は左も五月蠅げに眼と共に儘かに口を開き

病僧「貴殿の折角の仰せではあるが、貧道は此世では迚も遂げられぬ望を抱けば、彼世で心の滿足を得んため、此くは斷食を〜て一日も早く未來に至らん事を願ふてをるのですから、貴殿にお話〜申〜たところが實に無益です

と再度眼と口を閉んとするを、壯士は遽てゝ口を開き

壯士「ナニ貴僧のお望みは、此世では遂げられませんと、是は怪〜から、陽氣發處金石亦透精神一到何事不成で蟻の念ひさへ天に通ると云ふに、況〜て万物の靈長たる人間の望みが、遂げられないと云ふ事が有りませうか、貴僧のお望みは如何樣なお望みか存ぜぬが、勇猛精進法の爲には喪身失命をも避けず、百尺の竿頭にさへ、更に一歩を進むるの胆力ある禪宗僧侶の御身分で有りながら、生て、望みが遂げられぬ故、死で想ひを全うするなど、女々〜い事を仰せあるは、凡俗無智の拙者にも、甚以て其意を得られません、何故左樣な心弱い事を仰せです、何故火に入ても燒けず水に入ても溺れずの勇氣を奮つて、其お望みをお遂げ成さらな

いのです、數ならねども拙者も武士の一人ですから時宜に依ては貴僧のお味方をして、縱令命に懸けても、其お望みを遂げさせて進ぜますから、兎にも角にも其お望みの次第を御腹藏なくお話し下さい

と思入つて問掛れば庵主は悄然として目をしばたゝき

病僧「左までの仰せに背くは如何にも失禮に似たれども、貧道の望み申すは身にも姿にも不適當ぬ事にて頗る法に背いた次第なれば此儀許りは如何樣に仰せあるとも、貧道よりは申し上げ難い、然し不見不識の貧道に對して、厚い御親切をお運び下さる貴殿のお志が嬉しければ、末期命終の時に臨みなば、此身の煩惱罪障を吾手に書殘して、紀念の一品と共に此庵中に留め置けば貧道の滅後に御一覽下さるやう尤も御一覽の上にて、不愍の者と御憐み下さるとも、又痴愚な奴と御笑ひ下さるとも其段は貴殿の御心底にお任せ申します

と言ひつゝも、亦目をしばたゝけば、壯士は破顏微笑して

壯士「一回懺悔すれば、五逆十惡の罪も消滅すると、佛は說れたでは有りませんか凡俗を脫離した御出家の身で人に話せぬとは如何な次第です、何樣な惡い事か、何樣な醜い事か知りませんが人に話すと思召さないで、佛に懺悔すると思召したら、何も言ひ憎い道理は無いではありませんか、然し他人の隱密事件を承はるのに自分の姓名も來歷もお話し申さないのは、第一無禮でも有り且は序を失つた理ですから、拙者の姓名と來歷からお話し申しませう、イヤ拙者の隱密事件から先へお打明け申しませう

と故意と言もうち解けて、松葉と松の實を破瓦の上に盛添へ、先づ蚊遣の烟をば立添へ手に持てる團扇にて蚊遣の畑をあふぎつゝ

壯士「拙者は此山の麓の牛田村の庄官、落合三郎兵衛の家に、先日から

食客に成てゐるもので、少〻公儀にも、世間にも、憚る所があるから從來故意と姓名を包で、誰にも素生を明さずにゐたが、貴僧の御心願が承はりたい許りで、身の憚りも顧みず、打明けてお話し申すから、萬望御他言は御無用に願ひたい、實は拙者は當地を知行する宮城敬十郎の次男で、同苗敬次郎と申すものです

庵主の病僧は、壯士の此の語を聞いて、大に驚きたる面色、兩手を膝に面を擡げ再度其顏を見直して

病僧「ナヽ、何と仰しやる、貴殿は宮城氏の御次男とな……

と尙も不審を抱ける樣子に壯士は然こうとうち笑みて

壯士「只此樣にのみ申〻ては、如何に貴僧が禪機に敏く、山を隔て、烟を見て、早く是火なるを知り、牆を隔て角を見て便ち是牛なるを知る擧一明三目機銖兩の智識を具へても、卽坐に御會得はあるまい、其敬十郎の次男なる拙者が、何故領分の庄官の家に食客に成てゐると云ふに是には仔細の有る事で、頗る他聞を憚る次第だが、恥を言はねば理が聞えぬから、一家の內事までお話し申すが拙者の兄、卽ち當主の敬太郎は、宮城家の實子で無く實は他家から養子に參つた者で、何故又兄が養子に參つたと云ふに拙者は父の後妻の子で、先妻は不幸にも、子といふ者を一人も儲けないので、跡目相續の都合に依り、餘儀無く、分家なり重綠である尾州家の藩士宮城幸之進の三男辛三郎……

と云ひかけ〻際、庵主は如何に間漏せ〻か言遁し〻く

病僧「チョッと失禮ながら、只今の處を今一應……

壯士は何の心も無く

壯士「尾州家の藩士同姓幸之進の三男幸三郎卽ち兄の敬太郎を幼少の時から養子に貰ッたが兄を養子に貰ッた其翌年に父の先妻は病死〻て、其後拙者の實母が後妻に參つて、間も無く拙者を儲

けたが、既に其以前に兄の敬太郎は、公儀へ相續人の屆がしてあるので、宮城家の血統でありながら、拙者は即ち部屋住み、其後拙者が成長するに隨ひ、父母の寵愛も漸次に加はり、殊に母は女の愛着心から、密に兄の家督を廢して拙者を立てる意見を貯へて、内々父にも其事を勸めた樣子だが、流石は父は男だけに、理義に賢しい處があつて、一旦敬太郎を養子に貰ひ、既に相續人の屆もしながら、今更敬次郎を出來たからとて、公儀に對し、世間に對し、且は敬太郎の實家に對し、左樣な不條理な事は出來ぬと、公けの道理に私しの情愛を換て、只拙者を順養子にだけ定めて置いたが……

と言ひ掛けて蚊遣に咽たるか、一ツ二ツ咳をして、鼻紙把り出し目を拭ひ、更に語を續ぎて

「一昨年の秋に父は疫症に罹り僅々の日數の煩ひで、世に無き人の數に入り、其後は兄が家を續いだが、幸ひ其筋のお覺えも目出度く、現に今日の所では、將軍家の御上洛の供奉をして、大坂表に滯在して居り、又拙者との兄弟情誼も、人に賞められる程睦じく、是迄永の歲月の間、只の一回も牆に鬩いだ事は無く、手足の交りを全うすれど……只悲しきは兄と母とが、現角母子情誼の熱しかね、兄に薪を棄て歸るの孝心が有ても、母に指を嚙むの慈愛が乏しく、動もすれば、一家に風波が起るが、其原因を糺して見れば、全く母の私情から、已が實子の此敬次郎に、宮城の家名が續せたいからの事、うの情愛から言ふ時は、拙者の身に取ては忝けなけれど、若し道理から考へると、物態無い事だが、難有迷惑なので、寧そ順養子の名を棄て、他家に養子の身と成て此の風波を鎭めやうと、數回其事を言出しても、母は中々許してくれず、然うかと言て此儘に長く邸宅にゐる時は、如何な珍事の起るも知れねば

漸く一條の窮策を廻らし、本年の春から道樂を始め、吉原の花に浮れ柳橋の月に狂ひ、酒と色とに身を壞頽し、尙其上に當今の時世に就いて、聊か感ずる所もあるので、文學と武藝に秀でた書生や浪士に交りを結び、磊落不羈な行ひをしたところが、果して其策が圖に中ツて、拙者が放蕩な品行について、内々公儀から御沙汰もあり、且は親類中からも嚴格しく言ふので、流石愛情の厚い吾母も、貴重な家名には換られない處から、公儀と世間の所思をかねて、拙者の不品行を糺明の爲め、當村の庄官の三郎兵衛は、頗る嚴格な人物なので、夫を見込で當分の間拙者の身体を托された次第で、拙者の當今の身の上は源氏の君の須磨の流謫などいふ、粋な譯でも無く、顯基の中納言が罪無て配所の月が見たいと言た物數奇を眞似た次第でも無く、言はゞ自ら求めて自ら得た江戸放逐で、佛家の所謂自業自得といふのさァハ、、、、面白も無い履歷談しして、貴僧の清聽を汚し、却て斷食の疲勞をお添へ申して、何共以てお氣の毒だが、拙者の素生をお明し申さないと貴僧の御安心を買ふ事が出來まいと存知て、然し情慾の火坑を脱し、生死の塵界を離れた、貴僧のお心では、凡俗無智の衆生が、虛名浮利の爲めに營々することを淺猿しけれと、定めて莫忘想の嗤笑なさるでせうアハ、、、、

とうち笑ひて言を改め

「拙者も只今の如く憚る可き事も、愧づ可き事も、盡く打出して、お話し申したから、万望貴僧も其御斷食の因緣と、其御心願の次第を、御腹藏無くお話し下ださい、謹愼の身ではござれども、拙者も宮城敬次郎若、拙者の身分に於て出來る事なら、命に掛けても貴公の御心願を適へて進ぜませう、拙者も武士の頭數ですから、決して然諾は奪しません、又何樣な秘密を承はつても、決して他言

ハ致しません、念の爲め此くの通り

と傍に置たる刀を把上げ、小柄を拔いて金打してまた其實情を視しけるが、庵主は壯士の談話を聞きて頻りに目をしばたゝき、口を曲げ非常に感情を動したる樣子なりしが、卽て濕みし聲を出し

病僧「今夕の只今まで迯拙僧が斷食の因緣ィナ絕命の病根は、命終身滅の後までは決して人に知らすまじと、心に念じてゐたなれど、貴殿が深重の御慈愛に默止難く、耻を妄れ醜きを忍んで、事の秘密をお漏し申すが貧道の望みの基とひふは、貧道の病の根といふは、卽ち是でござります、不便と御覽下されよ

と言ひつゝ細き手を懷中にさし入れ卽て取出して壯士の前に置きたる一品を、壯士は手に把て月に透せば、僧侶の所有品には不適當ぬ、亂菊の彫を爲せし平打の銀釵にて然も其身が過日落合方へ保管けらるゝ際阿母の注意にて、落合の娘の絹に手土產の數種を調して齎せし內の一品なる、亂菊の銀釵なれば、更に不審の晴やらず、庵主の顏を熟視めて

壯士「此の銀釵が貴僧のお望みの種とは……

と問へば庵主は悄然として涙を拂ひ

病僧「貴殿が當村を知行めさるゝ宮城氏の御次男で、加之へ落合殿に御寄宿と承はるからは、尙更以てお話しかぬる次第なれど、幕府の直參たる貴殿が見る影も無い貧僧に向ッて、金打までしてお尋ね故、耻辱も慮外も顯みず、心の秘密をお明し申します、貧道が生國俗籍は聊か申し兼る次第もあり、且申上ても用の無れば、只其銀釵の因緣のみ摘採でお話し申すが、貧道此春までは駿河に在て淸見寺濟等の諸大刹に往來して、悟道の奧旨を參究して居ましたが、此の甲州は經宗の本山である身延山の在る處とて、自然法華の信者が多く、頑愚い人情だと聞いた故、暫時此地に錫を駐めて、其頑愚い衆生の濟度も仕度く且は尙ほ向上の一路を究

めたく、當月の下旬に此地へ參ッたが、幸ひ此の落葉山は閑靜の地なり、荒てはあれど庵室も有る故、此に一夏を送る目的で、姑く衣鉢を卸ーたれど、元より無錄無檀の貧地なれば、只托鉢を以て肉身を養ッてゐまーたが、忘れもせぬ、イヤ忘れたいにも忘られぬ、此の四月の二日の日、例の如く托鉢に出て、隣村の鏡中條村を廻つた歸りがけ、此の牛田村の盡處へ來ると、圖らず向ふから葬禮が來た故、路傍に歩を停めて其通行を避けたが、靈柩の行き過ぐるを見るよりも、元より出家の役なれば、慈悲の心で回向をすると此の葬禮も經宗にて、例の頑愚ーい信者なれば、貧道の志を惡く採り、祖師が天魔と仰せられた、其禪宗の賣僧めが、餘計な回向を仕をつたから、此の亡者は成佛をーない、太い坊主だ、憎い坊主だ、以後の懲戒に打擲ッてやれと、葬式の伴に立た俗人は勿論引導僧までが、合併になつて、寄ッて群ッて貧道を、散々手籬めにしてゐる處へ、一個の下婢を伴に連れた、衣服も姿色も美麗ーい、十七八の娘が通り掛ッて、此の体を見て中に這入り、一言二言仲裁ーてくれたが、多くの人は之を聞いて、誰とて抗辨ふ者もなく、その、まゝ貧道を打捨て、逃るが如く立去ッたので貧道は嬉ーサ、忝けなサ、感涙と共に禮を述ると、娘は夫を聞も敢ず、是式の事に何のお禮に及びませう、此邊の者は堅固法華が多いで、時々他宗の御僧侶に、此樣な失禮な舉動をーて、眞に困ッたものでございますと、優ーい挨拶をーた上に、頭上に挿た

と言ひつゝ壯士が膝の前に置たる銀釵を手に採り

「是此の銀釵を拔取つて、偶々奪いお方に値遇ーたから、生憎布施の用意が無いから、異樣な品でございますが、是は妾が或る貴重なお方から頂戴いたので、妾の身に取ては大事な品でございますから、お布施の代りに之を進呈ませう、万望此の銀釵を下すつ

たお方と妾の身との、現當二世の安樂を御回向下さいますやうと言ひながらさゝ出すを、手に持てる鉄鉢で受けて始めて其娘の面を見れば、月の黛花の顏、端嚴微妙の其相貌、大液の芙蓉の水を出し粧ひ、未央の楊柳の雨に濕るゝ姿、五天竺第一の美人と聞えた、耶瑜陀羅女に親しく見えた想ひ、忉利天に住るゝ吉祥天女を面前拜んだ心地、三十二相八十種好を具足したとは、此んな人かと倘能く見れば、貧道が錫杖に縋ッた案ゞ子に似た姿を可笑り思ふたか又は何か心に羞らふ事があつたか、艶やかな顏に笑ひを含んだところ、尙一段の風情を添へて、巨勢の金岡も筆を投げ、毘首羯磨も鑿を捨るだらうと思はるゝ許り吾知らず是に見惚て、肝心な回向の文句も浮の空、娘が別れて行く後姿を見送ッて、幾度か嘘と歎息しながら、地は蹈ども心は空夢の心地で庵室へ歸りましたが……

庵主は此く言ひさゝてホット溜息なし、やゝ暫時俯首しが又も口を開きて

「世に恥辱しい事ながら、其後始めて戀てふものを思ひ知り、心裏の佛は何處にか身を藏して、只其娘のみ幻に立ち、坐禪の床に坐れば、尊容は彼人の姿に見へ、觀法の座に登れば、經文は彼人の語に讀れ、少し轉寐めば只管添寢する心地して、忘れやうとする程愈々忘られず、思ひ捨やうとする程益々思ひ出して果は其面影が造次にも離れず、顚沛にも立退ねば吾ながら最淺猿しく、志賀寺の上人の御息所に於る、清水寺の律師の新命婦に於る、古き例を思ひ出して、偖は道心の怠惰を天魔が覗ふて煩腦魔が萌したに疑ひ無い、一念の起るは病ひの纏がざるを藥とすといふ、故人の語も有れば速かに斷妄の利劍を用ひなければ他生の緣を引くで有らふと、頻りに佛に懺悔すれど、更に其甲斐も無く、愛慾の

水の爲めに益々智惠の火を消され執着の雲の爲に愈々修觀の月を掩はれ只管闇路に迷ひ入るのみ、ツイに疾病の床にさへ就いたので若し此のまゝで滅に入らば輪廻の妄業にも成るべければ、切めて一度の逢ふ瀬もと幾度心に思ふたれど、先方を聞き合はすれば、名に負ふ一村の庄官の娘、貧道は見る影も無い雲水の身迚も及ばぬ願ひなれば、何日まで娑婆に長居へ居て、色界の餓鬼となるよりは、身汝すれば心も亦滅すと言へば、早く肉身を捨て此苦患を忘れんものと此樣に斷食をしてをりまする

と後言ひさして、痰や咽喉にかゝり、蚊遣にや咽せけん、そのまゝ咳入て、蒲團の上にうち臥けり……從來著者が唯壯士とのみ記して、敢て其名を明言せざりし、宮城敬次郎は、今しも不識庵主惠鶴が戀慕の迷ひの懺悔語を逐一に聞て、心の内に思ふやう、吾邦にては生靈死靈の物に祟り人を惱す談話は敢て珍らしとするに足らねど、吾朋友の内にて開成所に通ひ、西洋の學問を修めてゐる某の説に、西洋の心理學者は、夢或は幻想或は催眠術などの不思議の理を窮める會を結び其會にて近來は、人が通常の官能に由らず、其他の一種の法に由て、人の感念を他に通ずることが出來るものであると云ふ事、即ち吾邦で云ふ生靈の働きと云ふ事に就て理を窮めて、其事の適例を七百餘も集めた、立派な書籍が出板に成てをるが、其書籍の終りに、人の心靈は普通の官能の以外の法に由て、互ひに感觸し、又感觸される力を有てをる事は、尤も確實で有て、之をテレパシーと稱ぶと、斷言て有ると言ふてをりしが、目今吾寄宿なす落合の娘お絹が近來一種不思議の病を煩ひ、毎夜丑三の鐘を相圖に、何か物に魘はるゝが如く、奇異なる譫語を發し、非常なる苦痛を感ずる由、下婢共の不問語に承知せるが、但是熱の高低に依て、然らしむる事ならんとのみ思ひ定めて、更に不思議とも、存ぜざりしが、サテハ此の庵主が戀慕の一念の凝固りたる生靈即ちテレパシーの爲す業にこそ、若此

儘にて打捨置なば、庵主は勿論娘も共に、果敢なき最期を遂ぐるは必定なり、何とかして庵主の妄念を斷ち、娘の一命を助けて遣らま欲しと、稍暫時思案を凝せしが、卽て思ひ得たる事あれば、胸の秘密を色にも出さず、故意と聲高くうち笑ひて

壯士「貴僧の御病根イナお望みば、生ながら、兜卒天にまでも登りたいと云ふやうな容易く、成し遂げられぬ次第かと存知たら、高が一婦人に就ての事とは、實に案外千万な譯です、成程貴僧は片雲野鶴に齊しい雲水の一孤僧、女は苟且にも一鄕一村の取締をして、名字帶刀の許しを得たる庄官の娘なれば、如何にも釣合ぬ緣談なれども、其處が所謂戀に上下の隔離無き、若貴僧の眞情が彼娘に通じ、彼娘さへ承諾すれば、釣合も隔離も入らぬ話只少しく貴僧が戒行を保たねばならぬ、御出家と云ふ御身分に就いての嫌ひはあるが、淨藏貴所は妻を持ち、一人の子さへ儲けた後も、平生の法力は少も衰へず、尙鴨川の水を逆流させ、八坂の塔の曲りを直したといふ、古い例もあるから、若大乘の法に依て、小乘の節に拘はらぬといふ、貴僧の御見識でさへあるなれば、夫等の事も決して妨げはありますまい、或ハ又當今尊王攘夷の議論世に喧しく、苟も愛國憂世の志あるものゝ、高臥安眠する時節ならねば、落合の娘と婚姻するを幸ひに彼の伴林六郎が元是神州淸潔民の詩を吟じて、法衣を琵琶湖に投入れ、慨然立て國事に身を委ねた氣節に習はれて、元の俗籍にお復りなさるとも、夫等の事は貴僧のお心任せですが、拙者は世に云ふ乘りかゝつた舩なれば、物數ならねども、地頭の悴たるの威光と、慈に上下の隔離の無い理由の二ッを以て、父の三郎兵衛と、娘のお絹の二人を說諭し、弓矢八幡刀に掛けて、屹度貴僧のお望みを遂げさせませう、下賤の諺にも云ふ如く、何をするにも生命が原因であるに、貴僧のやうに

左様に思ひ屈しておいでなされては不可から、心を大きくお持ちなさい、今晩は最早深更に及んで何をするも致し方がないが、明朝は早天食物を持参して進ぜるから明日より從來の狹い心を取直し、三度の食事を四度も喫ッて、一日も早く元の壯健の身体にお成りなさい、然して物も喫ずに寐てござっては、何を爲る事も出來ないから、貴僧に向つて艶めかしい事を申すやうなれど、院本作者の近松門左衛門の語に、さりとては若いぞへ死で花實が開くものか、樂むも戀苦むも戀戀と云ふ字に二ッは無い、眞は辛抱一ッぞやと言ふてあるが、實に名言では有りませんか、佛說の所謂色卽是空空卽是色で空といひ色といふも、悟つて見れば同一物、貴僧は元より敎外別傳の旨を窮めらるゝお身の上、速かに、活眼を開いてお悟りなさい呵々々々

と竪に說き横に論せど庵主はさすが恥入てか只黙頭くのみ返答無し

老杉空に聳へ亂石道に横はる、落葉山の徑を頂上の方より頻りに謠曲を謠ひつゝ麓を指して降り來る一個の壯士、道の傍に眞黑なる物の臥してをるに目を認め、木の間漏る月の光りに透して見て其人なるに疑念を抱き、傍近く進み寄れば、人も人然も負傷者なるにぞ、愈々驚駭を添へその儘手を掛けて抱き起したれど氣息既に絶えたれば、矢庭に活を入れけるが、負傷者はウンと計りに目を見開き、月の光りに壯士の顏を見てハッと駭き

「ヤア貴卿は宮城の若且那様……

此語に壯士は更に負傷者の顏を見直して

「オヽ貴様は役割の市五郎ぢやアないか

第三回　蝸牛

牛田村の隣村なる鏡中條村の中程に上總屋と呼べる旅店あり、此家の土等室に百目掛の蠟燭を點せし眞鍮の燭臺を晝の如く輝かせ、洗魚冷

物など見るも涼しげなる下物を山の如く積せ、清酒に燒酎に泡盛に各種の飲料を泉の如く湛へさせ五六人の俠客が或は裸躰或は偏襟或は丈六組み孰も惣身の花紋を露はして、團欒に座を構へ、盃わ大なるを厭はず、箸は太きを辭せず、鯨の如く飲み、馬の如くに食へるは、國芳の繪の水滸傳の豪傑が、活て此に顯れたるかと怪しまるゝ、許り、是なん此の近郷にて會津の親分、藤五郎親分と尊稱らるゝ博徒の巨魁が部下の樗蒲皿の熊吉、病犬の源十、捻鉢卷の長太など云へる無賴漢を集めて、酒宴を催ほせるにて、其中に第一回に落合の娘お絹の難病を療しかね、半途にして匕を投げて逃走せる旨を記したる、靜閑醫者の田淵脩庵も立交りたるが、是は彼が滑稽輕辯に長じて、人の頤を解くに巧みなるのみか、花鳥の使者、妾の周旋などに妙を得て、今日ならば叩頭學博士とも言ふべき人物なるを以て、平素藤五郎に愛顧にされ、今宵も此席に招かれて、笑ひと媚とに興を助くるなり。熊吉は飲程酒の廻りしと見え、已が綽號の

樗蒲皿の如き目を据へて

熊吉「エー、此う言つちやア、チツト口憚つてエ言語だが關八州に隱れの無エ會津親分の部下で、樗蒲皿の熊と云つちやア、少しは人に知られた兄ィさんだ、人をつけ面白くも無エ、小旅下の下僕上りアノ市五郎の木菜野郎が、親方……ヘン張形が糞が呆れらア、オイ坊さん、イヤ先生コヽ此の丼に一盃酌いでくんネエ、酒でも澆ネエちやア、肝癪の虫が納らネエのだ

田淵は法師頭を振立て

田淵「モシ熊さん、お前さんのやうに、親分の前も憚らないで、コレザ判つてゐると云ふのに、マアお前さん其振廻す手巾で、口の周圍をお拭きなさい、顏中泡なら未可だが、泡中顏だ、遠乘の馬から過剩を取て、蟹をして三舍を避けしめて、癲癇病者も宜しくだ

藤五郎は團扇使ひも鷹揚に胸部をあふぎながら

藤五「オイ脩庵老熊の野郎の泡の制度より、貴公の津波で、坐敷中が霧の海になりさうだ、喇ッても好いから口を開かないやうにして下せへ

病犬の源十が傍より口を挿み

源十「アハヽヽヽ、默ッて喇れか、是りや好い、流石負ん氣の先生も是れにやア閉口だらう

修庵「閉口とは難有い、口を開くなゝら閉口より仕方が無いアハヽヽヽ、默つて喇るのは筆談だが、夫ぢや恰是朝鮮人と談判だアハヽヽヽヽ

折角脩庵が當意卽妙の智惠を絞ッて、捻り出したる閉口といふ洒落も筆談と云ふ頓才も、他の無學文盲の乾兒には驢耳彈琴なれど、流石親分と云て藤五郎は之を解する者の如く

藤五「閉口と文字で洒落て、筆談と嚴格ッく出掛けたところは、流石稼業柄で感心だ、其舌の半分匕が廻つたら、如此な田舍で蛙切を相手にしてゐなくつても、江戸の中央で、楼木門に玄關構への華美な家に住で、四枚屑の長棒で、病家先を廻つて、大名旗下を相手にして暮せるだらうに、氣の毒なものだアハヽヽヽ

修庵「親方の又迂廻しの罵詈が始つた……其樣な事は如何でも好いが時に親方、今夜の喧嘩の原因は如何したのでげす、敵將の市五郎といふ男は勝沼で料理屋をして居る花菱と云ふ宅の亭主で、已が家名を其儘肩書に用ひて、彼邊では隨分幅の利いた俠客で元は江戸の旗下屋敷で役割をしておて、確か芝の政田屋の……

藤五「修庵老貴公は大層委しいなア、彼奴の履歷が……今日の喧嘩は賭場の間違へ、許りでは無エので、如此な時に已の腕を見せて置かネエと少し……アノ市五郎は、豫て貴公に頼んで置いた一件の内へも行くぢやア無エか

俯庵「アノ落合へですか、往きますよ、彼奴は出入りますよ、蓋か以前彼の村の地頭の宮城に奉公してゐた其縁故があるだとか言ふ事です、夫はさうと親分貴郷さんが苦労なさる、落合の嬢さん彼りやア到底此方の品物では有りませんぜ

藤五郎は少し遠込みて

藤五「サア其處だ、其處だから、已も男の意地で腕づくと顔づくで、取て見せる目的で、如此して貴公を運師に頼んでゐる譯ぢやア無エか、夫に此方の者ぢや無エなんて氣の弱へ、已も會津の藤五郎だア、一旦此う思込だからにやア、何が何でも貰はねエぢや置かねエのだ

源十「元來彼の娘の掛合は、此病犬が頭から嚙附けて、アノ老爺に承諾と云せる氣だッたのを、親分が戀は枝折には不可ものだからとか何とか、演劇の臺詞見たやうな事を云て、幸ひ俯庵老が彼家に出入するから、彼の男の舌頭で程好く遣らせようと、已等の言ふ事を聞かずエで貴公を使者に遣た譯だらうぢやずエか、夫に今更其樣な事を……

長太「オイ田淵さん、氣の弱へ事を云はずエで貴公の法師頭へ……締りは無エかも知れねエが……已の綽號の捻鉢卷を確り締めて一番ウンと掛合ずエ

熊吉「後陣にやア此の樗蒲皿が扣へてゐるから、何も怖れる事は無エ、先が大庄屋だつて屈でも無エヤ、藤八拳でも知れて居らア、庄家は狐に負けるぢや無エか、況して此熊吉さんに出會つちやア、一も二も有るものか、笑アーやがらア

と親分も子分も、酒と血氣の勢ひに任せ左右より俯庵を圍繞き頻りに管を巻きかければ、俯庵は両手を擧て顔を皺め

俯庵「イヽエサ、マア愚老の談話を結局までお聽きなさい貴公方は兎

角……イヤ然う義經流の向ふ意氣の強い事許り言ても不可ません、今愚老が此方のものでないと申ーたはお絹嬢の病氣の事で……何の貴公さん、親分は今甲州でイヤ關東で屈指の俠客なり、加之に標致はよし、談話をすればすぐ調ふ緣談の事は判ッてゐるが、何分相方が病人で然も九死一生と來てゐては實に仕方が無い次第で、是許は愚老の匕頭イヤ舌頭でも如何うも……

藤五郎は之を遮りて

藤五「イヤ、先生貴老の匕頭では仕方はあるめへが、舌頭では隨分仕方があるだらう

俺庵は凹んだ顏を突出ーて

俺庵「如何するのです

藤五「如何するッて彼の嬢の病氣の事は、己も貴老に聞いて疾うから知ッてゐるが……

俺庵「左樣……

藤五「アノ病人は、最初貴老が藥を盛ったのでは無へか

俺庵「左樣……

藤五「其病人を他の醫者の手に懸けて、加之に其醫者の手で本復でもーた日にやア、夫こそ貴老の名にも關はるぢやア無へか

俺庵「元より爾です

藤五「ダカラ貴老、翌日にも落合へ往て、アノ老爺を說附けて、今煩ッて居るアノ嬢を己の手に入るやうにするが好いぢやア無エか

俺庵「アハヽヽヽ何の事だ、愚老の身の上に就てのお話かと思ッたら矢張……アハヽヽヽ何程親分がアノ娘に執心だからッて、死かゝッてゐるものを貰ひ込んで、如何なさるンです、マサカ抱いて寢る譯にも行くまいしーアハヽヽヽ

藤五「オイ、〳〵、先生貴老左樣な氣樂な事を云てゐるから不可無エの

た

俺庵「ダッテ、親分アノ、死懸ッた病人を

藤五「死かゝッてゐる所が此方の附け目だ、何分己がアノ娘に何だッて、マサカ死かゝッた病人を如何ーようとも思はねェが貴老の談話では勞症だといふぢやアねェか

俺庵「マア、然う病名を附けでは置いたが

藤五「病氣は何でも搆ゐ無ェが、如彼な妖化屋敷のやうなダヤッ廣い隱氣な内に引込で許りゐるから、其樣な病氣が出るのだ、己の方へ呉れさへすりやア、すぐ草津か伊香保へ湯治にても連れ行て、暫時保養させらア、爾うすりやア治る事は請合だ、病氣が療りやア、己の望みも遂げられるし貴老の顏も立ッと云ふものぢやア無ェか、如何だ先生己の此の考へは貴老の診察より確實だらう、

俺庵は掌手で剃立の頭を二ッ三ッ叩いて、

俺庵「妙々、頗る妙、流石親分は親分だけ、是は好いお考へだ、愚老が參る分には何の造作もありませんが……愚老の從來の病家をアノ青沼の片桐めに奪られて、今更其家へノコ〳〵行くのは何分愚老が……

樗蒲皿が横合から

熊吉「ソ、ソ、夫が不可ェのだ、何も貴老他の用で行くのぢやア無し親分の使者に行くンぢやア無ェか、親分の威勢を肩……イヤその光る頭に乘せて、庄屋の宅へ飛込で、娘を呉れる呉れなきやア、呉れ無ェで了簡がある、曾津親分は元より、多勢の子分が承知ーねェから、と、此う一番遣附けねェ、後詰には此の樗蒲皿が扣えて居らア、何の貴老、一六勝負が、早くッて好いやア、夫に今夜の喧嘩の一件も、先方に聞えてゐるだらうから、親分の威勢は尙更だ、一も二も無く諾と云ふだらう

捻鉢卷が語を繼ぎ

長太「夫に貴老、アノ娘は何も一人娘と云ふのぢやア無ー、立派な弟が有るぢやねェか、シテ見ればアレが相續人といふ譯でもあるめへ、到底人の女房になるのなら、親分の所へくれば互の僥倖だア、病犬の吠る如き調子にて

源十「僥倖も糞も入ら無ェのだ若此談話がうまく出來無ェと賣込だ親分の顏に關係るから、先生、何でも確實遣ッつけ子ェ

藤五「今晩の市五郎との出入も、彼奴が落合の所へ出入するといふ事を聞いたら、モシ活ーて置いて、彼奴が談家方に成て、尻押ーでも出やアがると面倒だから、夫で三人の奴輩に迹を逐せて遣たのだ

熊吉「此方は三人向ふは一人

源十「モウ今頃は殺害たらう

長太「先生、貴老も親分の愛顧を受けるからにやア、度胸好くーなくッちやア、不可ねェ若貴老が舌頭で話込でも落合めが、四の五の言て娘を呉れ無ェ時にやア、已等達が腕力で談判するか、但ー又、夫でも程好く不可ェ時にやア、一旦親分が此うと見込だ女を、人の所有にするのも忌々ーいから、寧ろ貴老の匕頭で……

藤五「コレ大きな聲で詰ら子ェ事を……先生、マア兎も角も、明日の掛合の前祝に一杯遣ンなせェ

と前に置て有た大盃へ二分金を二個三個入れて脩庵に献せば、脩庵受けておー頂き

脩庵「イヤ、是は黄金湯、是なら落合の娘の難病も全快すること請合で

げすエへ、、、、

と追從笑ひをする折ーも、最前市五郎を追駆けたる三人の子分が立歸りたるか廊下を歩く烈ーき足音がすると間も無く障簾の外より

「親分歸りまーした

と聲を掛けつゝ藤五郎が酒宴の廂へ、ドヤ〳〵入來りーゝ兼に藤五郎の命を受けて花菱の市五郎の迹を追ひたる三人の子分にて、眞先に進みたるは、惣身に彫りゝ花紋の繪を共儘紳號に用ひたる、越後無宿の瓠弄物の三吉、次は身体の肥て腹部の突出たるが其物に似たればとて錦魚の綽號貧ひ〜野州無宿の茂九郎、次は何彼にコセックのと身体の小サキを以て鐵と呼るゝ上州無宿の忠次、孰も年は二十より三十までの間にて、血氣に早る壯士なるが、手足や顏の血の染みたるを得意らーきゝ樣子にて袖を捲り裾を揭げて、傲然とーて座に就けば藤五郎はヂロリと見て

藤五「如何ーた遣附けたか

瓠弄物は肩を怒らーて

三吉「親分、御安心なせへ、錦魚と鐵と三人で、遣附けて來やーた

藤五郎は快然にうち笑ひ

藤五「然うか、夫は御苦勞だッたサア兎も角も骨休めに大きな盞で一杯やるが好い

と言ひつゝ、傍に居る三人の子分と俯庵に向ひ

「汝等は肴を取てやれ、先生は御苦勞ながら酌をーて遣てくんそ

此命令に樗溝皿、病犬、捻鉢卷の三人は各自に肴を皿に盛て三人の兄弟分に侑める、俯庵は壜子を把て第一に三吉の手に持てる盃に酒を酌とーて三吉が小鬢に受けたる疵より出〜血潮に横面より襟首へ掛て眞赤に汚れたるを見て、大に驚き震へて、酒を酌ぎ溢せば藤五郎は冷笑ひ

藤五「オイ先生、何だ震えて、アノ位な摩擦疵にぶる〳〵ーて、モット大傷な怪我人の料治を頼れたら如何する、確乎ーねへな、家業からにも似合はそエ

俵庵は此の一語に厭まされて、震へる齒の根を嚙締めながら

俵庵「エヽナニ愚老だッて親分……是は武者震ひでさア

藤五「イヤ武者震ひではあるめへ、先生のは醫者震ひだらうアハヽヽ

子分一同も思はず噴出して

「コイツは妙だ、違へねエ

と暫時笑坪に入りにける、稍有て藤五郎は翫弄物等の三人に向ひて、言葉を改め

薩五「現場の模樣は如何なだッた

と問はれて三人は顏見合暫時目と目で私語きてをり、錦魚と鐵は口を揃へて翫弄物に向ひ

茂九「三吉兄イ、お前談話上手だから親分に立廻りの始末を……

忠次「うまく話してお聞せ申してくんネエ

俵庵は側より口を挿み

俵庵「江戸の落語家の圓朝ッラ去年の夏、甲府へ來て興行して大當りで有た、アノ人の口調で演劇掛りでお頼み申しやす、桁木ぐらぬは愚老が打ちやすから

樗蒲皿や病犬や捻鉢卷も之を聞いて口を揃へ

「ソイツは面白かんべい、功名譚の演劇がゝり、三遊亭の親玉確乎頼みやす、所望〳〵

三吉は頭を掻きつゝ

三吉「然う皆ナに敎唆られちやア、眞に話し惡いが、エヽ隨意よ、如何で善く出來たからッて、澤山纏頭が貰へるといふ譯でもネエから、共代り下手に話したからッて、叱咤も出めへ、贅辨は偖置て親分の命令に因て、三人が市五郎の迹を逐やしたが、牛田村へでも行て宿る目的か、北の方へスタ〳〵行きやアがつて、然も足の早へ

こと、韋駄天から過剰を取りさうなので、牛田の村稲荷處の落葉山の麓でヤット逐附きやーたが、鐵が當座の方便で、私ハ葦簀張の茶店の陰に癒れ、錦魚ば土堤の陰に身を忍ばせ、故と鼠が一人に成て、足早に逐廻り身体より大きな聲を出ーて、ヤア〳〵其處へ打せ賜ふはとも言はねへが、チョッと熊谷撲樣で花麥の市五郎暫時待て、會津親方の子分に於て、强者ありと世に聞えだる、鐵の忠次が見參〳〵と呼掛けたので、市五郎は迹を屹度振返ッて月の光りに透ーて見たが鼠の外には犬の兒一頭も居ヲエので安心ーた樣子で、オー己を呼んだのは何の用だと言ふ間に、鐵は尙傍に寄り、イエ呼だのは他でも無エ、先刻の談判を仕直に來たのだ、覺悟をーろと突然拔打に切て掛ると、彼奴も元より油斷ーヲエから、一足迹へ飛退ッて、心得たりと拔合せて一合二合々す間も無く、鐵は豫て謀ッた通り、故意と敵はない風に見せて、一歩二歩ずり〳〵と迹に退ッて、トウ〳〵私等の藏れてゐる場所まで、敵を誘引き寄せたので、私等二人は時分を見計ッて、一度に身を顯ーて、ヤニハに背後から斫ッてかゝりやーたが、市五郎は之に少ー驚いた樣子だッたが、元より氣の强い野郎なり、腕に覺えがあるから、少ーも怯んだ景色を見せないで、私等三人を相手に右に支へ左に拂ひ、卍の如く、巴の如く、鬼の如く、夜叉の如く、縱横無盡に働いて、私の小鬢へ疵まで附けやーたが、活ーて還ーては親分の名折だと思ッて、三人が氣を勵ーて、踏込み〳〵斫結びてトウ〳〵其場へ斫臥せやした

藤五「ソイッは格別の骨折だッた然ー夫程の働きをーて何故已への土產に市五郎の首を持て來ヲエのだ

藤五郎の此一語に三人は又顏を見合せて眼と眼で私語きーが今度は鐵が恐る〳〵

忠次「首を持て來子ェのは實に不調法でげーたが、市五郎の野郎を田の中へ斫倒ーて、三人で寸斷々々に殺伐やーたので、モウ是で大丈夫と思ひやーて一時も早く歸ッて親分に此事を言てお喜ばせ申ーやせうと、其方へ計り氣が取られてッイ……

藤五「ヂャア確かに息の音は止たのだナ

甄錦「エー確かに殺害けやーた

藤五「ヂャア此方も用意をーなけりやァならチェ

俑庵「用意ッて落合の娘と婚禮のですか

藤五「夫も有るが今言ッた用意は其方ぢやァ無ェ市五郎を殺害けたからは、彼奴の子分が仕返ーに來るに遠ひ子ェから其用意だ、然し先生其事に拘はらず、貴老は明日落合の方へ行てくれなくッちや行けず子ェ

此の話ーの内に子分の面々は鉢巻をーたり、裳を端折ッたり、非常なる騒擾を始るを藤五郎は徐かに之を制ー

藤五「ヤイ野郎共、何をヂタバタするのだ

子分「エ、、市五郎の子分が仕返ーに來るとおいひなすッたから、其用意を……

藤五「何だ遽てるな、市五郎が遣られた事が蓮沼へ聞えて、夫から來るのだから早くッて明日の晩だ、馬鹿な奴輩だ……

此の語の尚了らぬ内に、此家の雨戸を破れる許りにドン〳〵叩き、甲張たる聲にて開けろ〳〵……上總屋の廣間の廊下なる葭簀障子の外に會津の子分に俑庵まで立交り、各自腰に長刀を佩び、袖を揭げ裳を端折り、向ふ鉢巻まで一樣に卒と云はゞ打て出ん勢ひにて、一間の樣子を伺ひつゝ、手眞似と目顏に語勢を補ひ肩にて押ーあふ密談閑話

三吉「市五郎の野郎を搗いで來た野郎は、武士らーいが、元來何だらう

熊吉「會津親方の本陣へタッタ一人で押込でくるたァ、滿身が膽のや

うな野郎だ

源十「然も其癖、女に、ーてへやうな好い男だ

脩庵「流石は親分は親分だ、此家の下婢が、一人のお武士が、疵だらけな市五郎親分を肩にかけておいで爲すつて、藤五郎とやらに逢ひたいと仰ーやいますが如何ーませうと言た時に、ウンと暫時考へて、一人かと念を掛ーて、野郎共、皆ナ其處脩庵先生も此處に居ちや不好い、已が呼ぶまで一人でも顔を出ーては不可ンぞと、愚老までも驅逐けて、一人舞臺に成て敷てゐた蒲莚を拂ッて、正ーく坐を搆へ、サア此席へお通ーし申せと云たところは、實に千兩俳優だ、沈着いたものだ、大きな舞臺だ感心々々

忠次「ケレども、市五郎を連て、武士が來たといふ事を聞て、吾等の顔を大きな目でグット睨ンで、今汝等が遣附けて來たと云て、尙其唇も乾か無エのに、モウ市五郎が活て來たぞ意氣地無ーめが、三人で一人を遣附けるのに、止めも刺ーやアがらずエで將來チット反省ンで、口計りポン〳〵吐すなと叱られた時にや、飲だ酒も一時に醒めて、已が名のチウの音も出なかッた

茂九「元來已が止めをと言ッたのに、山の方から遣ッてくる、謠曲の聲を聞いて、何でも武士らーいから危險だ、見附られると面倒だから早く逃ろッて、お前達二人がヤタラに驅出すものだから、ツイ已も……

忠次「元來三吉兄ィが、あんまり圖に乘て、市五郎を田の中へ斫込で、三人で寸斷〳〵に遣附けたなんテ大層な法螺を吹くから惡いンだ

三吉「今更其樣ナ事を言ッたッて仕方が無エ、時にアノ武士は先刻の謠曲かも知れ子エぜ

茂九「其又謠曲が何だッて……

長太「オイ、聞き子エ、ソラ、市五郎に因縁の有る者だとか何とか武士が言てゐるぜ

源十「毎もと違ッて、今日は親分の談判が大層穏和だぜ

熊吉「相手が武士だから少し恐怖の氣味だらうか

脩庵「馬鹿な事をお前方を驅逐ッて、一人で應接する位の親分が何で武士を恐怖がるものか、人を見て法を説けで相手が相手だから故意と穏和にしてゐるのでせう

と言ひつゝ障子の隙間から中を伺いて急に此方を振向き

脩庵「奇妙だ不思議だアノ武士は近來落合の内へ江戸から來て、食客を極めてゐる武士だ……

六人の子分は之を聞くより

「ナニ落合の食客だと

「ドレ已にも

「チョッと

「誰だ己の股間を脱けて

「コレ痛へやナ足を踏で……

と互に押退け揉退け吾勝に親かんとするを脩庵は両手を擧げて之を制し

脩庵「コレ〳〵、然う騒いぢやア肝心の談判が聞えぬから、マア靜穏かに〳〵

此の廊下の騒擾にひきかへて、坐敷の内には會津の藤五郎と宮城敬次郎が互に威儀を正して對坐せるが、藤五郎は子分の隠れをる障子を背後に爲し敬次郎は負傷者の市五郎を背後に圍ひたるが談判も最早半途を過ぎたる樣子にて

宮城「前刻も申したる如く拙者は此市五郎とは免れぬ因縁の有るもの故此く市五郎に成替ッて御掛合申すが、元來是なる市五郎が

所用に依て當村に參り、貴公が御宿泊なさる此の旅店へ強て一泊を求めたからとて夫を無殘に逐歸すのみか、三人の子分に迹を遂ハせて暗殺同樣な事を爲せるとは俠客を以て自ら許さるゝ貴公の爲され方とも心得ぬ、些か卑怯な擧動ではござらぬか

藤五「イヤ賭博家には賭博家の大法があるもので早い話しが私の子分が勝沼へ行けば、市五郎親分の處へ挨拶に行くのに私が此間から此村に此うして賭場を張てゐるのを知てゐながら只一言の挨拶も無く私の泊ッてゐる宿へ押込で來て、強て宿めろと言張るので、私も男の顏が立ず、子ユから、賭博家の大法に依て市五郎親分を逐出しやしたが、三人の野郎共が跡を逐驅けて其樣な乱暴な眞似をした事は、私は少しも存知やせん然し子分の乱暴は親分の乱暴と有て強て私を相手に成さると云ふなら、私も會津の藤五郎だ何日何時でもお相手に成りやせう

宮城「拙者の聞いてをる處では、市五郎は貴公の泊ッてゐるを知らなかッたと云ふ事だが、夫は水掛論で證據が無いから強ひて、彼是は申さんが、貴公が知らぬ事なら、知らぬ事にして、三人の子分は市五郎の當の敵だから、此座に於いて、拙者にお渡下さい

藤五「三人の野郎共は、先刻出たまゝ未歸りやせんから、何共御返事は出來やせん

宮城「シテ、今にも歸ッて來たら……

藤五「夫も彼等の了簡を聞いて見た上で有無の御返事を致しやせう

宮城「萬一彼等が逃亡して、歸ッて來ない時は如何なさる

藤五「お尋ねまでも無く子分の卑怯は親分の不名譽、此の藤五郎が身に擔任て、後見にお立ち爲すッたお前さんの顏も市五郎親分の顏も立つやう、屹度捌き方をいたしやせう

宮城「シテ其返事は何日までに……

藤五「エヽ、野郎共の所在を探る日數も有りやすから……今晩イヤ明日から五日の間に……

宮城「ウム宜しい、五日の猶豫は聞濟んだ、夫迄の間に子分の居所の知れない時は、又改めて掛合ふから、其時に卑怯な挨拶をなさらぬやう

藤五「御安心爲せエやし、私も會津の藤五郎です、怪痴な事は申しやせん、然し何處へ御返事を……

宮城「ウン牛田村の落合に逗留して居るものだから、其方まで……

藤五「エヽ、落合、アノ牛田村の……

宮城「チヽ、然うぢや、市五郎サア參らう、確りいたせ、歸つて疵養生をして取らせるから

第四回　夜の鶴

甲斐國巨摩郡牛田村に落合三郎兵衛と云ふ豪農あり、當村第一の門閥にて、地頭より名字帶刀を許され、世々左官職を勤めをれり、當代の三郎兵衛は年齒知命の上を超え、性質極めて、温良にて能く下を恤みければ村民の者に旦那と貴まるゝのみか、併せて佛陀とさへ崇められけり、妻を繁と云ひて年齡も氣質も好く良人に適ひ是亦人の妻たる者の鏡よと近郷近村の者にも賞贊られけり、夫婦の中に男女の小兒あり、長女を絹と呼びて本年十八歳かゝる美人は江戸にも多くはあるまじと云はるゝまで、其容貌の美なるーきに適ひて、其性質も優に美しく佛陀の子の菩薩よと賞嘆され、長男の秀次郎は本年十二歳、是亦標致才力兩ら人に秀でゝ、其名に負かざれば、父三郎兵衛も未頼母敷思ひて、去年より甲府なる稽徴館へ寄宿させ頻りに學問を勉强させけり、此く記したるのみならば、家道豐富に夫婦和合く容貌才智兩ら優れたる男女の子をも儲けて、落合一家は望月の缺たる事なく、又此の小説も著作れまじきを、盈れば缺るは社會の原則とて、娘絹は此四月の下旬より、一種不思議の疾

病に罹り、醫藥よ、加持よ、祈禱よ、と金力にあかして治療の術を盡したれども、露程の効驗も無く日を逐て衰へゆき、今は、頼み少き容態なれば、三郎兵衛は更なり、お繁の苦勞はひとかたならず、今日も亦た夫婦が居間の樣端にて白髮頭を突合せ、互に涙に鼻つまらせて

お繁「ヂヤア、片桐先生は、アノ、モウお藥の力では……

三郎「アヽ、コレ、お繁、泣ては不可ン、モシ其聲がお絹の病室へ聞えると惡い、彼は晝の間は氣が確かで、格別耳が近うてソシテ近來は就中物を氣に懸るやうに成てをるから、汝の泣聲を聞いたら、一層病氣の害に成るで有らう……アレも本年は、モウ十八、相當な緣談が有たら嫁に遣ッて、一日も早う初孫の顏を見て、夫許りを樂しんでいたのに、青沼の先生がアヽ仰しやるやうでいヽト、ト、迚も彼は……噫南無妙……

お繁「人にナヽ、泣くなと仰しやりながら、アヽ卿がヤヽ矢張り、ソ、ソレ、其お題目が……

三郎「イヤ、余は泣ン泣はせん……時に此の間から言はふと思ッて、ツイ事に紛れて忘れてゐたが、五六日前に途中で田淵さんに逢ふたら、此方で醫者を換たのに、否な顏もなさらず相變らず、御親切に、娘の容態をお聞なすッて、愚老も是迄多くの病人を療治たが、御令孃のやうな不思議な疾病は始めてだ、恰是御年齡であるから、万一相思病ではあるまいか如何も病名の附けやうが無い、久しうお出入をしたお宅の事だから、お藥を上る上げぬに係らず、近日に又お見舞申しますと云れたが、親の目からは未少女のやうに思ふてゐるが、アレもモウ十八の娘盛り、何ぞ其樣な心當りはありはせぬか

お繁「吾子を親が賞めるやうですが、アノ通り裁縫と讀書習字に許り精神を依托して、少しも浮薄しい事は無く偶々村に演劇や淨瑠

璃が出來ても、アンナ淫猥なものは見るものでないアンナ卑陋いものは聞くものでないと、親が勸めても行かないで、旦那寺の說法には聽問に行くといふ、他の娘とは變ッた氣質、少〻陰氣過る、嬌稚過ると世間で評判される上に、此上も無い親孝行な子ですから、よもや、其樣な病氣では……

お繁は此く言ひ掛けて、何か心に感じたる樣子にて暫時眉を皺めて居たり〻が、や〻有て言葉を改め

お繁「アノ、旦那俗庵樣は氣の許せないお方で此間も宅へ參ッてをる長太の姉のお吉の茶店に腰を掛けて、娘のイエお絹の事に就て藤五郎とか云ふ俠客に賴れたといふて其藤五郎の子分と何か密々地談話をしてゐたとやら、此後田淵さんが見えましても、迂濶お相手にお成りなさいますな、夫に引替てアノ甚七は、江戸から歸りがけに、途中で娘の病氣の事を聞いたからとて、草鞋足の

ま〻で見舞に來て、夫から、朝夕かゝさず尋ねてくれますが、今朝も見舞に來て妾への話に、江戸に居た時、恰是お孃さんと同じやうな病人が有たが、或る猛い武士に夜伽を賴ンだら、その武士の威光で病氣が癒つたもあ、物は試しだから、何處からか劍術の先生でも賴ンで來て、お孃さんのお伽をさせてごらんなさいと、親切に勸めて行きましたが、責めてその遣情に其樣なお方でも雇ふては……

三郎「イヤ、其樣な事は講釋や物の本に能くあるが、夫は着き者のした病人の話、娘の病氣には如何有うか、然し試みに雇ふてくるにも病氣が病氣で、外聞にも拘はるから、滅多な人を賴む譯にも行かず

お繁「サア、夫について妾の考へは、アノ宮城の若樣の御逗留を幸ひ、アノお方をお願ひ申して……

此の言を聞いて三郎兵衛は暫時思案せるが、尚も聲を低めて

三郎「成程……若旦那をお頼み申す分には、外聞にも拘はらず、殊に武藝にも秀でゝ居られるといふ事だから、至極好い考へではあるが、夫に就いて、アノ若旦那は此の二三日毎晩何處へかお出かけだといふ事だが何處へお遊びにおいでなさるやら、昨日の朝長太が、旦那は毎晩おでかけですが、何かお樂みでも出來まーたかと、戯談紛れにお尋ね申ーたら、イヤあまり月が好いので、宵から寐るのも不風流だと思ふてと、仰ーやッたさうだが余の考へでは、夜半になると娘のアノ苦痛、自然御安眠のお妨害になるので、夫をお五月蠅思ふて、お出かけかと察ーられるが、ソウ云ふ處へ、病人のお伽を願ふのも、少ー恐入ッた譯では無いか、お本邸宅の御都合でお姓名までも包まれ、アゝーて余の家にはおいでなさるが、御地頭の若旦那に違ひ無いから……

お繁「サア、恐入ッた願ひではあるが、平素からーて御親切なアノ若樣娘の病氣をお氣にかけられて、朝夕容態をお尋ねなされて丸で御自分の妹のやうに思召して、何彼と御心配をーてですから、よもや御迷惑にも思ーめすまい、ドウゾ、卿かち若樣へ、宜ーくお願ひ遊はされて……若樣の御親切で思ひ出ーたが勝沼の市五郎が、三四日あとに娘の病氣見舞に來て鏡中條へ行て用を達ーて、歸りに又寄て屹度お伽を致ーますと、堅い約束をーて行たぎり、今日まで何の音信も無いが……

三郎兵衛はお繁の言葉を遮り

三郎「サア、其市五郎の事に就いても少ー談話があるが……今若旦那は……

お繁「ヘイ確か閑室で例の御書籍をお讀みあそばーて……

三郎兵衛は娘の病室と宮城の閑室へ氣をかねて、愈々聲を低め

三郎「三四日あとの晩鏡中條で、騒動の有た事を、最前八幡宮へ参詣の途中、今お前の云ふたアノ甚七に聞いたが、汝は未少しも知んのか

お繁「ハイ、先刻お松がチョイと其様な事を……確か賭博家の喧嘩だとか

三郎「喧嘩の相手の一個はアノ汝、市五郎で、向ふはソラ、此の近郷に名の高い、會津の藤五郎だといふ事だ

お繁「へー然うでございますか

三郎「尚夫許りなら好いが、市五郎は藤五郎の子分に疵を負はされたさうだから、夫で歸りに寄らないのと見える

お繁「オヤ、マア、可愛想に、その疵は……

三郎「疵の箇所は多いが、切れない刀で、利ない腕で遣たのだから孰も薄傷で生命に別條は無いさうだ

お繁「夫はマア好うございました

三郎「イヤ尚、好く無い話を聞いたので……其喧嘩に就いて市五郎の腰押しをしたのは、年の若い、美い男の浪人者だといふ事で、何でも近々に、會津と花菱と互に子分を引卒て、花々しい喧嘩の仕直しが有るが、其時にはその浪人者が、花菱の加勢を去て、一番技倆を見せると云ふ事だと云ふ風説だが、その年の若い、美い男の浪人者といふのは、もしや宮城さまではあるまいか

お繁「エ、アノ若様が……

三郎「是は余の推量で、屹度然うだといふ譯でも無いが、汝も知てゐる通り、市五郎は宮城のお屋敷に御奉公をしたものだから、旁以て然うではあるまいかと思つて……万一其様な輕卒な事でも爲されると江戸の未亡人様に對して余が何とも辨解が無いので密かに御心配申去てをるのだが夫に就いて何ぞ思ひ當る事

でも無いか

お繁「イヤ、然う仰ーやれば、昨夕松が申すには、松本様(松本とは敬次郎の母方の姓にて、敬次郎は落合に寄宿中、地頭の子たるを人に知られん事を憚りて故意と此苗字を用ひをるなり)は……最前卿も長太から聞いたと仰ーやったが……此の三四日、毎晩御辨當と釣竿を携て、おでかけに成てお辨當は毎も空になさるがツイゾ雜魚一尾釣てお歸りに成た事ハない、如何も不思議な事だと申ーてをりまーした、夫がヤッパリ其喧嘩の……

三郎「フーン、ハテナ、長太の話といひ、お松の不審といひ、如何も合點が行ぬ、擘そ汝の勸めに從ふて、余から直接に娘の事をお願ひ申ーて、其序に夫と無う、御樣子を伺ふて見やうか、何分にも、會津と花菱と喧嘩の事が氣になるから……

お繁「是まで、手に手を盡ーたアノ子の病氣、モシ若樣の御威德で、スッカリ全快ーたならは、妾は死でも厭ひはございません

三郎「縱ひ全快ばせぬまでも切めて、毎晩の苦痛でも薄らいたら夫こそ如何なに嬉ーからう、夫につけても、脩庵老の醫案、モシ彼の病氣が……

お繁「サア、相思病とやらで有たらば、卿は如何なされます お心算で…

三郎「如何と云ふて、万一其樣な事の有るにもせよ、代々庄官職を勤む る家格だから、モシ釣合ぬ緣談では、如何も承知が……

お繁「うんなら假令娘が命に係ハる事でも、アノ卿は……モシ默ッておいで遊ばすか、此處が親の考へどころ、妾の思ふには、親の片意地や、偏屈で、アタラ娘を殺ーたり、一人息子を家の出入の出來ぬやうにする慣例が世間には幾條も有りますの素で無い事のやうに思ひまする……妾は萬が一にも、娘に想ふ人でもある なら、娘の命には換られないから、少ーは釣合ぬ緣談でも、望を遂

げさせてやりたうございます……

と言ひつゝ袂を顔に當て嘘泣れは三郎兵衛も嗚咽り

三郎「お繁、今いふたのは表向き、何の余じやとて可愛い娘のこと……

……然し娘の病氣が其樣な事なら、又分別の仕やうも有うが、アノ通り毎晩く、時刻を限つて必死の苦痛、アリヤ何でも着物に違ひあるまい

お繁「苦痛といへば、身躰の疲勞たせへか此の三四日は少し譫語が少ないやうですが此上、若樣にお願ひ申して今の話のやうにお伽を願ふたら、愈々苦痛が薄くなるも知れぬから、善は急げでチツトも早う……是はホンの妾の邪推でございますが、晝間お松が只一人、看病をしてをりますと、例もアノ娘は、若樣のお優しい事を言ひ出して、此間途中で托鉢の出家の難儀を救ふて、若樣からお土産に頂いた、アノ菊の釵をお布施に進ぜたが、今更思へば惜しい事をしたと、泣いたり悔んだりするさうですが……モシお絹はアノ若樣に……

三郎「フーン、モシ、其樣な事なら若殿樣は何とお思召してゐられるか知らぬが、無理にもお願申して……然し爾云ふ話は男では堅くなつて不可ぬから夫では汝が前の話を兼て……

お繁「ハイ左樣なら妾が若樣のお閑室へまゐつてお願ひかたく御樣子な親つて……トハ云へ痩衰へたアノ容態では

三郎「サア余も如何も心許ない

お繁「花でいふたら尚蕾の……

三郎「アヽ、コレ、娘が目を醒したと見えて……

お繁「ヲヽ、アノ又咳き入ること

と云ひつゝ顔を見合せて互ひに溜息を突きにけり

お松「お嬢樣、モシ貴嬢、若旦那樣が……お嬢樣

敬次「イヤ、コレ、お松、折角能く寐てゐるものを、起さんが宜しい、又後に來ませう

お松「イヽエ、若旦那樣、昨日も貴君樣がおいでの事をお目が覺た迹で申上げましたら、何故起してくれんと仰しやつて、大層妾を……

……オホヽヽヽモシお嬢樣、貴嬢、アノ松本樣が、貞之助樣が（宮城敬次郎の變名）入ッしやいました、モシ貴嬢……

庄官三郎兵衛の娘お絹は夜分の疲勞にスヤ〳〵と眠り居たるが、今下婢のお松が松本といふ聲にフト眼を覺せば、吾家に寄食せる松本貞之助が枕頭近く坐を占め、白地の帷子の上に黑紹の羽織を被り、殿中扇にて胸襟のあたりを靜かに煽ぎつゝ

松本「お絹さん今日は如何な御容体です少しは好い方かね、アヽ、モシ生が來たからといふて、無理に起るには及ばん、ヤッパリ其儘寐ておいでが好いお松、お額のところを一遍拭いてお上げお汗が……

と毎もながらの優しき言葉にお絹は嬉しさに羞かしさゝへ交加ぜて蒼白みたる顔に淡然紅潮をおびて、郡内縞の蒲團の上に起坐り緣なす髪のほつれ毛を細く眞白に水晶を延べたる如き指にて耳の後ろへ搔き上げをる風情、久しく病の床に臥たれば、沐浴もせず、梳髪もせざれど花の顔、雪の肌、更に一點の垢をも着けざるのみか、愈々色の白きを加へて、宛然透き徹ほる如く漢土の詩人が十分春瘦燕猶輕、霧縠纖羅恐不勝と詠ぜし詩句さへ思ひ出されて風雨の夕の櫻とも野分の朝の女郎花とも譬へに方無く、心を病める西施も此の美麗こそ有りつらめ、此の愛嬌は如何でと思はるゝ計りなれば、吉原の花に遊ひ、柳橋の月に浮れ、傾城に慣れ國色に飽たる敬次郎も漫に見惚て、此る田舍に此る美人有るは、眞菰の中の菖蒲はものかはと心の中に深く感じてゐたるがお絹は

吾身の背後に坐りて江戸土産に貰ふたる榛原製の團扇にてそよ〳〵扇ぎをるお松を見返りて

お絹「コレ、松、妾は宜いから若旦那様を……毎度お見舞下さいまし て眞に恐入ります、お蔭さまで此の二三日は少え氣分が好いやうで……

松本「晝間は別段お煩悶も無い御様子で……

お絹「ハイ、お晝の内は、何處が惡いと申すこともございませんが何分夜分に成ります……

と言ひ掛けて眉を皺め〳〵が、急に氣を轉へて

お絹「コレ、松や、地袋の違棚の上にある染附の香合を持て來て、白檀を薫らして……病人の傍は惡い臭がするものだから

松本「イヤ其様なお心支は入ん事で、何も熱病と申すでは無し……如何です、何かお喫りか、片桐先生は何と、仰しやつてゞす、お藥はアハヽヽヽ此う一遍に物を尋ねてはお返事にお困りだらう然し勉めてお藥も飲み、ソシテ、何か身躰の滋養になる物を喫らんと不可よ

お絹「ハイ難有うございます

お松「何程お侑め申しても否だと許り仰しやつて、何にも召上らないので困てをるのでございます、お嬢様若旦那様もアノ通り仰しやいますから、お否でも勉めて、召上らなくては不可ません

と言ひつゝお松は茶を入て貞之助に侑め

お松「若旦那様お茶を一椀……

貞之助は茶椀を把りて輕く啜り、莞爾笑つてお絹の顔を熟視め

松本「お絹さんお前は優れて親孝行だから御両親に心配を懸けさせまいと思ふなら、一日も早く氣を取直して、病氣の本復するやうにしなければ不可ンよ、御両親の心配は中々一通りでないから

……實はお前のお母アさんが生にお前の病氣の事で種々御相談が有て今夜から生にお前の夜伽をしてくれと、お頼みが有たから、生は承知はしたが何分お前が夫を氣にして、遠慮するやうでは、却て病氣の害にもなるから今日は晝の中に能くお前とお打合せをして、互に心の置ないやうにして置かないと不可ンと思つて……萬一御迷惑だと、惡いからノウお松……

お松「イヱ、貴君、如何いたしまして……お嬢樣は妙で御座いますよアノお醫者の田淵樣がお見舞においでなすつて御病人の胸膈の開ける爲めだと仰しやつて、種々面白い事を仰しやると、夫が却て御病氣の害に成て……貴君がお見舞においで遊ばして御嚴格いお話を爲さるのが、却て御保養にお成り遊ばすと見えて、オホヽヽヽヽ一日貴君のお顏がお見えあそばさないと、今日は若旦那樣は如何遊ばしたか、万一御病氣では入つしやるまいかなと、御案じなさいまして……

お絹「コレ、松や何を詰らん事を……

お松「イヽヱ、宜しうございますよ眞正の事を申し上げるのでございますから

松本「アハヽヽヽヽお松が相變らず氣輕な事を……看病人は兎角氣輕なのが好いので、一に介抱二に藥りといふから病氣は介抱が何より肝心です、時にお松、生は今日お前に少し話したい事があるが毎も嚴格い事許り云ふと思はないで聽いてくれ、此んな事は、お絹さんは疾うから御承知の事だが女といふ者は、三從といふ敎が有て家に在ては父に從はねばならぬもので、お前もモウ年齡だから、孰れ近々に緣附くだらうが万一心に染まない良人を持つ事が有ても、思ひがけない緣を結ぶ事が有ても、両親の命令なら、承諾と云はなければならず、又自分で婿撰みをするに

ゝても、其男の標致の美麗なのを專一にゝないで、自分に對ゝて實意のある人と、性質の善い人を撰んで良人にゝなければならない、お前に限つて、其樣な事は無いが、世間の浮氣娘には、自分勝手に男をこゝらへて、両親に心配かけたり、両親の許ゝた緣談を否がつて苦勞させるものなどが往々あるが、實に了簡違ひな話ゝで……アハヽヽヽ如此な事を云ふと何だかお松を嫁に遣る緣談の爲めに、媒妁口をきくやうで可笑ゝいが、フット思ひ出ゝたからアハヽヽヽ

お松は貞之助が他に意ありて此る事を言ひ出せるとは少も悟らねば若旦那は妙な事と仰ゝやると心の内にて思ひながら思ず扇ぐ團扇の手を停め貞之助の顏を見て今ゝも返答をせんとする折からお絹は細き聲にて

お絹「お松其處の書棚の上にお菓子があるから、若旦那樣に……

松本「イヱ、お拂ひなさるな、御病人の御枕頭で堅詰つたお話ゝ許ゝて……是からチット江戸の談をゝませう

お松「若旦那樣、ドウゾ、吉原や柳橋で花魁や藝妓にお可愛がられ遊ばゝたお話ゝを……

松本「是は怪ゝからん生のやうな野暮な人間に、如何ゝて其樣な事が……夫よりは生の好きな演劇のお話ゝでもいたゝませう

お絹「ハイ、万望……

松本「イヤ、蓋かお絹さんは演劇はお好きで無いといふ事で有たから、何か小説の……ヲヽ八犬傳のお話でもゝませう

お絹「尙結構でございます

トさも嬉ゝさうに嫣然笑へばお松は松本の前に菓子器を置きながらお松「オホヽヽヽヽ久ゝぶりでお嬢樣のお笑ひ顏がオホヽヽヽ

不識庵主惡鶴は先夜圖らず宮城敬次郎に邂逅ひ、夫が親切なる訣諭に悟りを開きゝイナ、夫が確實なる保證に迷ひを長じ、一旦捨んと思ひ極めたる命を保ち、迚も適はじと考へたる望みを遂げんものと遂に心を回復しけるが、宮城は亦其夜の約に背かず、其翌晩より時刻も違へず尋來り、携へ來る辨當を開きて懇に食事を侑めければ、惡鶴は其志に感じ、少しづゝ箸を把り初めしが、固より身に疾病のあるにあらず、殊に血氣頗る壯なれば、さしもの衰弱も薄紙をへがすが如く、一昨日よりは昨日、昨日より又今日と漸次に快く成り、一日のこと其日は殊に氣分好ければ尙も氣力を添んゝ爲とて、勉めて庭に下り立ち、茂れる草を拔き、積れる木の葉を拂などしてゐたるが、其昔は草に置く露を見、風に散る木の葉に對しても、無常觀を起せる身の、今はさる感情は無くて露繁き草を見ては、思ひに濡るゝ吾袖に比較べ、拂寄せ、落葉を見ては集めて物をとうち歎息れ、あらぬ方にのみ心を傾けつゝ、吾知らず泉水の汀に立寄りて寫すともなく、吾面を寫せしが、髮こそは尙剃らね髭は昨日自ら剃りたれば顏の色白く、髭の痕青く、五分以上も延たる髮の毛は眞黑にて、天鵞絨もて包みたる如くなれば、吾ながら淫に見惚て、衣裳こそ汚穢きたれ形容こそ枯稿たれ、吾も過日ころ、淸見寺の大會の時、五百人以上も集りたる僧衆の中にて、第一の美僧の名を得たるものを、若此の顏に髮を蓄へ、衣裳も袴羽織に改めて、兩刀を腰に手挾みなば、亦是一個の美丈夫にて、落合の娘の良人と言はるゝも、花の傍なる枯木とまで言はるゝ不釣合なる夫婦にてはあるまじ、姿こそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなん、豈夫心のみならんや、馬士にも衣裳の世の譬、姿も亦花になさばなどかならざらんと獨り呟きて山鳥の痴情の鏡の夫ならで、吾と吾姿に見とれ、一心不亂に池の面を見つめぬたるが、不思議や吾姿の傍に頭髮を講武所風に結ひ、黑き羽織を被り、白き帷子を着け、靑き袴を穿ち、美麗なる兩刀を佩びたる一個の美丈夫の現れければ、偖は吾心に

思ひたる吾姿の水に寫りしか、但は他に人や來りと急に回顧るトタンに背後を輕く叩く者あり、驚いて目を注げば何日の間にや來りけん、宮城敬次郎が手に大きやかなる包を携へ、莞爾と笑ひて佇立ねたれば、惠鶴わ手に持る箒放擲て、そのまゝ宮城を方丈に誘引ひ尤も風透きの好き處に座を占めさすれば、宮城は惠鶴の容貌を諦視めて

宮城「大層御血色が好く成て、ソシテ、大分肉も附いたやうだが然しお庭の掃除などはチト早過ぎませう、あまり輕卒な事を爲されて又振廻すと不可ませんから

と言へば、惠鶴は嬉しげに

惠鶴「毎度御親切に難有う、今日はあまりに氣分の好いのでチョットけでも出さうと存知まして久々で箒と鎌とを把て見ましたが直に息切れがして、思ふ半分もイヤ十分一も作務が出來ませんの……落葉と雜草で歩く道もございませんから、責めて敷石だ

僅か半月有餘の斷食で此樣に衰弱へますとは人間も意氣地の無いものでございます、シテ今日はお珍らしう、晝間御訪問下すって、昨今は暑氣も格外嚴酷しう成りましたのに御承知の通り無一物の草庵で何の御接待もございませんが、只松風と清水だけが、御馳走で故人の詩に六月買清風、人間恐無價と申すのがございますが、若松風と清水に價が有りましたら、是も非常の御接待かも知れませんアハヽヽヽヽ

と快然にうち笑ひ、阿迦桶携へて庭に下り立ち、庭の一隅に流るゝ清水を尤も重げに汲み來り、盥に移して樣端に置き

惠鶴「サア、宮城樣、是に御手巾を浸して一回お汗をお拭なさいまし、お羽織もお袴も暫時お脱ぎ遊ばして万望御緩と……

惠鶴は敬次郎を生命の親とも月下氷人とも思ひて、心の限り饗應せば宮城は心の裡にて、人間は希望に因て活、又情慾の動物であるといふこと

とを、或る學者の談話に聞きたるが、如何にも其通りにて、此僧は一旦家を出で、身を捨て、五戒を受け、七情を去り、色卽是空の禪理をも修めたる身でありながら、尙煩惱の絆に纏はれて、昨日は落合の娘の爲に死を願ひ、今日も、余が一場の說諭に依て、意思を轉じ、今日は又彼が爲に生を欲するやうになり、病苦は忽ち快樂と變り、一日も早く、舊の壯健の身と成りて、彼と婚姻せん事を待つものゝ如し。春來てど心弱さも知られたり花になれ行く墨染の袖、夜の雨の窓を打つにも碎かれぬ、心はもろきものにぞありける。噫、情慾は人間の天性なる哉と、吾も亦頻りに感情を動がし、庵主が纓應の清水に手巾を絞りて汗を拭ひ

宮城「實に結搆な水で、何寄りの御馳走でございまし、た、人間の交際は遠慮の無いのが好うございますが、夏は……暑い時分は尙更で搆ふて頂かんのが結句御馳走です、イヤ早速ながら今夕は先夜一寸お話ト申した、勝沼の市五郎方まで參らうと存知て、夫故晝の間にお見舞申したので……

半聞きさして惠鶴は眉を皺め

惠鶴「彼の事に就て何か混雜でも……

と問ふを宮城は打消して

宮城「イヤ、御心配に預る程の事でも無いので、相手の會津の藤五郎と申す奴が、存外温和かな奴なので、少し拍子ぬけのしてをる位で先方より談判の日限の日延を申してまゐり、又市五郎の負傷も淺手で、此の暑氣にも拘はらず、最早六七分も全快したので、互ひに擬勢が拔けて、此の模樣では、喧嘩の仕直しもあるまいと考へられます、イヤハヤ一旦の血氣に早ッて、身分も生命も兩ながら忘れて、由無い事に、口を出して、實は今更後悔してゐる次第で、人の一寸吾身の一尺とやら、貴僧に對して喋々生命の貴重な事をお諭し申した其歸途に、己が生命の貴重な事を忘れて、世にも愚

かーい眞似をーて、實に人間と云ふものは、理の判らんものです

アハ、、、、

と例の花やかなる笑を爲せば惠鶴は皺めー眉をや、開きながらも、今日に於ては杖とも柱とも思ふ宮城の身なれば、宮城が此身に心配させまじと故意と手輕く言ふにはあらずやと心の底には尙案じ煩ひつゝ、敬次郎の身の恙なからんことを密かに佛に念じけり、宮城は携へ來りー風呂敷包を開きて笑ひながら

宮城「此の紙袋は米です、此の竹の皮包は味噌です、ソシテ此の蓋物の上は梅干中は鹽下は……少ー妙な物ですが松魚節田夫です味噌や梅干だけでゝ力の附きやうが遲いから、勉めて之をお上ンなさいナ ニ貴僧、覘子和尙は覘を撈ふて喰たといふ事ではありませんかアハ、、、、夫にお絹どの、病氣も漸次全快に赴きますから、尙更一日も早く御本復なさらんでは不可ませんア

ハ、、、、

惠鶴ゝ此の一語を聞いて思はず破顏微笑をぞ催ーける、是も亦敎外別傳不立文字以心傳心の妙理とや云はまー

第七回

青簾

宮城敬次郎の松木貞之助は已が閑室にと設け置れー、風透きの好き六疊敷の一席の明窓の下に坐を占めて、文机にうち對ひ、上田秋成が著述せる雨月物語の白峯の條を閲ー、其意匠の奇なると、其文章の妙なるに精神を奪はれて、さーも烈ーき暑さをも忘れぬたる處へ東道主人三郎兵衛が羽織引掛け入來り、慇懃に兩手をつかへ

三郎「今日も相ら變ず嚴ーいお暑さでございます、夜分の御疲勞もございませうに御午睡も遊ばさないでと挨拶すれば宮城は此方に膝を向け

宮城「サアもつと此方へ、お宅は何處も風透ーが好いが、此室は格別だ

から格外凌ぎ好いやうです、夜分起てゐる代りに嫌といふ程朝寝を致したから、目の償ひはチャンとつけてありますアハヽヽ

ヽヽイヤ何彼と御用も多からうに、お呼附け申して……

と言ひつゝ傍へに陳列せる茶盆の急須へ鐵瓶の湯をつぎて茶碗に移し、菓子器と共に三郎兵衛に侑むれば落合はおゝ戴きて、一口啜り

三郎「先刻お召しでございましたから、早速出る筈でございましたが生憎夏季租税の事で小前の者が二三人もまゐりまして夫に引續いて片桐先生が御見舞に見えましたので、ツイ……

宮城「ハヽ左樣でしたか、先生も一旦は御心配で有たが、昨今の彼嬢の容躰では如何かお骨折甲斐が有りさうで、實に結搆です

三郎「イヱ、彼の難病が、彼程迄に成りましたのは、全く貴卿樣の御蔭で貴卿樣に御夜伽を願ひまして、毎夜の苦痛が漸次に薄らぎまして、只今でハモウ、其氣もさへ無く成たやうでございます、實にハヤ難有いことで、家内とも蔭ながらお禮を申してをります此の御高恩は、死でも決して忘却は致しません、宮城は落合の喜ぶ顔を見て笑ひを含み

宮城「時に御主人、只今おいでを願ふたのも、實はお絹どのゝ御病氣の事で他でハござらんがお絹どのゝ御病氣は、此の敬イヤ此の貞之助が身に擔任て、此末とも屹度全快させてお目にかけるが若全快したならば、彼嬢のお身の上を拙者にお委任くださるか、三郎兵衛は宮城の問ひを聞きも敢ず

三郎「イヱモウ、申すまでもございませんが、此間中の彼嬢の容体では迚も此土の物とは思へませんので、彼嬢の命さへ取留められゝば、假令何樣な不具者に成ても、其儀は少しも厭ひませんからと神や佛に願ふたのみか、成らう事なら、夫婦の生命に替てまでも

と思ふた程でございまーなのに、貴卿の御介抱と、御夜伽のお蔭で、彼樣にまで成りまーた上に、屹度本復までさせて下さるなら何で否やを申ーませう、万望彼嬢の身体は、貴卿の御思慮次第に

宮城「その御心腹を承ッて、拙者も大きに安堵いたーまーた、然ーて病氣が癒ると醫者の藥禮が否になるが世間の人情、貴殿に限つて左樣な卑劣な事の有らう筈は無いが、何事も最初の約束が肝要ですから、尚念に念を入ておきますが拙者の丹精で、愈々お絹殿を本復させたら、彼嬢の一身は如何するとも、イヤ何樣な御相談を申すとも、決ーて否やの無いといふ、確かな御誓言が承まはりたい、若しも其場に臨んだ時に、貴殿は男子の事とも、決ーて御未練もござるまいが、御家内は御女中のことなれば、彼是が有ては甚だ迷惑をいたすから、お繁どのとも、一應御相談の上で尚更確かな御返事を聞せて頂きたい

と容も言ばも改めて、意味ありげなる宮城の所望に三郎兵衛は心の内に思ふやう、平素より若殿にはお絹の病氣に對ーて親切なる慰問を爲さるゝのみか、過日御夜伽を願ふてからも、熱さと睡さのお厭ひも無く、宵通娘の枕頭にお坐り遊ばして、世間雑話や小説稗史の暗誦、又は落語や人情談まで、面白可笑う言ふて聞せて、宛然兄が妹を介抱する如くわらゐる親切を盡さるゝが、若ーも彼嬢にお心の有ての所業にて、只今のお話も全く其意味をお言ひ出遊ばされーものか、万一左樣の事なれば、願ふても無き親子の僥倖假令お部屋住にもせよ地頭の若殿にて、立派な御旗本の御相續人なれば、若此人を婿に取りなば落合一家の名譽と云ふもの、到底孰にか縁附けねばならぬ彼嬢の身の上、さるお望みにてあるならば、爭で否やのあるべき、若又さるお望みにあらずとも、彼嬢が爲には、命の親の若殿樣お委任せ申すの外は無ーと潔く決心ーて莞然とうち笑ひ

三郎「失禮な申分ではございますが、生も一村の撿束を致す落合三郎兵衛一旦貴卿の御恩に感じて、娘をお任せ申すからは假令何樣な次第に成行きますとも、何で否やを申しませう、又家内の儀に就て、御入念でございましたが、ソモ貴卿にお夜伽を願ひましたは全く彼の發意でございますから、娘を貴卿にお任せ申すに就いて、何で苦情を申しませう、万一左樣な事がございましたら、此三郎兵衛が擔任まして……」

と思入たる樣子にて、凛然として答れば、宮城はいとも歡ばしげに

宮城「其御返事を承はりて拙者も滿足いたしましたが尚一條心が、

りが……」

三郎「トハ又何事で……」

宮城「然れば若又其場に臨んでお絹どのが……といふを三郎兵衛は遮りて

三郎「彼孃のことなら、決して御心配には及びません、彼孃が万一不承知を申しましたら、其時は親の威光でも、仏ヤ、貴卿樣に汝の身をお任せ申したから、其氣で早く全快しろと申し聞けましたら彼孃は定めて大喜びで、是迄渋紙をへがすやうに快くなる病氣が、其後は厚紙をへがすやうに、ツン〳〵と癒りませうアハ、、、

折柄庭の松枝に蟬の止りて聲高く啼きいだしければ二人とも思はず其方に視線を注ぎけるがお絹は父と宮城の閑談を聞かま欲しう思ひたるが疾病の間に何時しか端居近う居ざりいで樣側の柱を執へて立ちつゝありければ端無く敬次郎と顔見合せて互ひに、嫣然笑ひけり

第八回　杜の蜩（上）

牛田村より勝沼驛に至る往還を、少し東に入りし廣やかなる森の中に鎭座ます正八幡宮は、此の近郷の土地神にて、社殿の造營も壯嚴に

華表玉垣の朱の色も尙新らしく石燈籠も數多く立ち並びて田舍には見るも稀なる結搆なるが、此の境内の老樹の杉の下に佇立て涼を納るゝ三個の人あり、一個は尙十七八の娘にて越後の帷衣を着て、黄色繻子の帶をしめ、手に日傘を提げたるが何となふ意氣なるところありて此る草深き處には珍らしき美人なり、他の二人は是れが從者と覺しく一個は二十五六の苦味走りし、若者にて、大縞の浴衣に華美なる博多の帶を尻の先にメめ赤銅造りの一刀を腰に挿し、一個は十二三の小彫脹に肥たる、可愛らしき小奴にて、小さき帛紗包を持たり是なん前回に會津の子分の爲めに疵を負ひしむねを記せる花菱市五郎の娘おとくと、夫が子分の八反田の丑松と糸鬢の梅太なり、おとくは小聲にて

お德「アノ晩阿父さんが、一方なら無い御介抱を受け、其上金瘡膏とかいふ結搆なお膏藥まで下すつたお方は、落合の旦那樣の内に御逗留の、松本樣といふ江戸のお人だと、阿父さんのお話だから、今日は落合のお嬢さんの御病氣見舞かたゝ、其の松本樣にお目通りをして、厚くお禮を申して來やうと思ふがお前は其の松本樣にお近附きだらう子エ

丑松「イエお近附きといふ程でもごぜへせんが、此間の晩おいでの時にチョイとお目通りをしただけで……お德さん、お前さん、落合の旦那の内で、松本樣にアノ一件のお禮を云ては不可やせん親分が私に、松本樣は此事を、落合の旦那に内々で、御心配なさるのだから、他の子分にも其氣でゐるやうに汝から能く言ておけあんまり松本樣のお名が世間にパッとすると惡いと仰しやつた事がごぜへしたから……親分の疵が早く癒つたどころか實は命拾ひを爲ずつたのも松本樣のお蔭、會津の藤五郎と五分の達引を爲すつたのも松本樣のお蔭、ダカラ私もお禮も述たい他に少しお尋ね申したい事もあるので、如何か内々お目にかゝ

りてへものだと思ひやーて、夫で此うーてお伴をーたのですが

……

と言ひかけて梅太の傍に居るに氣がつき失措ッたアノ饒舌家に聞れたかと傍側を顧れば、梅太は小兒の無心にて二人の談話に頓着無く、幸ひ有合ふ長竿を持ち、彼方の杉の幹に啼てゐる蟬を搖落さんと、一心不亂に狙ッてゐれば、丑松は安心ーながら

丑松「オイ梅太、身体不相應な長い物を振廻ーて、モシ參詣の人にでも突當ると不可子エゼ

と注意の言葉を懸れば梅太に糸鬢頭を振立て

梅太「ナアニ大丈夫だよ、モシ突當て、間違が出來たッて己も花菱の子分の糸鬢だ、何も、兄貴の世話にやなら子エから

と門前の小僧の習はぬ經の格にて、流石に博徒の子分として年に增せた る、猛者言を放ちつゝ、尙ほもその長竿を振廻ーし、今度は飛び行く蟬を逐

ひかくればお德も見かねて

お德「コレ、梅太、浮雲いよ、人の云ふ事も聞かないで……

と留むる間もなく梅太は石に躓きて、蹌踉々々とする途炭に、今ーも來わゝりたる一個の武士の鼻の前に其竿を突出せーが武士は少ーも慌てず、手に持てる殿中扇にて輕く其竿を拂ひ、梅太に向ッて一言の叱咤も云はず、從容此方に進み來るを、丑松は遽てゝ走りいで

丑松「松本樣、小僧めが、飛だ失禮を致ーまーて、万望眞平御免下せへや

と小腰を屈めて謝罪れば、其武士は不思議さうに顏を眺め

松本「拙者を松本と云はれるお前さんは……失禮ちやがッイお見忘れ申ーた

と云ふに丑松は愈慇懃に

丑松「ヘイ私はアノ花菱の子分の丑松でごぜへやす

武士は笑みを含み

松本「ヲヽ左樣々々、先夜チョッとお目に懸ッたッけ強い失禮をいたしました

丑松「イヱ、旦那如何いたしまして……今日はお禮も申したく小伺ひたい事もございまして、今から落合さまへ出る途中で、チョッと八幡樣へ御參詣をしてゐやったが、丁度好いところで……卿も御參詣ですか

松本「余も花菱に少し話もあるから見舞かたく出かけるところぢやが序でながらといふと勿態ないが、八幡宮へ參詣をしてまゐらうと思ッて、然し他に伴でも

丑松「ハイ、アノ親分のイヽヱ市五郎の娘のお德が、落合樣へお嬢樣の御病氣見舞に……

と云ふ間にお德は恥かしげに進み來り兩の腮に愛嬌を充つゝ

お德「若旦那樣始めまして、妾は市五郎の娘のお德と申します不調法者で……今般は市五郎が一方ならない御高恩に預りまして、お禮の申しやうもございません

武士も言優しく

松本「是は始めて、イヤ、左迄の事でも無いのに、叮寧なお禮に預ッて却て痛み入る、時に丑松さんとやら、余もお前に少し話しがあるが落合の内では……

と暫時考へ

松本「お前達は落合の内へ行くのだから此うしやう、村稍盡處の、お吉の茶店まで行て、彼處で、話したり聞いたりしやう、然し一緒に續くあるも、少し人目を憚るから、往還へ出たら、余は一歩案内ながら先へ行ふ、然しお前方は……

お德「万望お伴を願ひます

丑松「コレ、梅太若旦那にお謝罪を申さぬか
梅太は始めの廣言に引きかへて如何な叱咤を言はるゝかと杉の木の下に蹲踞りて、只さへ小さき身体を格別小さくしてをりしが、此の時やうく進みいで
梅太「旦那、眞平御免なすッて……
と云ふも小音の口の内、武士は莞爾笑ひながら
松本「汝が疏相をしたので、此うしてお目にかゝれたのだから、過失の功名といふものだ、何も謝罪るには、及ばん、中々逞しさうな小僧だアハヽヽヽ
と笑ひつゝ八幡の社殿を遙拝してのまゝ先に立ちお徳丑松梅太の三人を後に從へて、往還さして立去りけり、此時社殿の背後より身を顯せし一個の男、今まで午睡やしてゐたりけん欠呻しつゝ四人の迹を見送りて、心に何彼默頭きつゝ、單衣の踞を高く揭げ境内の間道より彼方

を指して馳走りけり

第九回　杜の蜩（下）

お徳「モシ長太さん、松本様と丑松がお話をしてゐる、其間、暫時此の床几を借ますよ、お吉はんはお留守ですか
長太「姉ですか、姉は私の代りに、今日は庄官様へお手傳に行きました
お徳「妾も今日はお嬢様のお見舞に行くのですが、其後は漸次と宜しさうですネエ、旦那様や御新造様がサゾお喜びて入つしやいませう、オヤ長太さん、梅太は何處へ行きました、惡戯をして不可いから氣を附けておくんなさいよ
長太「隣家の方へ行きましたが、同年齢な小兒がゐるから同伴に成て遊ンでゐるのでせう……
乾菱の煙お徳と茶店の弟息子の長太と話してをるは、卽ち長太の家にて、本編の第一回に記したる牛田村の盡處の茶店の店頭なり、長太の母

のお捨は茶釜の下を火吹竹にて吹きながら、稼業に少しも抜目無く、往還の客人に目を注ぎて

お捨「お掛けなさいまし、お休なさいまし……コレ長太、何だエ、花菱のお嬢さんに、お朋友のやうな物の言ひやうをして、お嬢さん是れ此頃、毎日落合様へお手傳に參ッてをるもンですから、彼のお内で小前の者を待遇ふのを見やう見真似に、惡い癖がついて兎角お客様に對して、存在な物の言ひやうをして困りますのでオホヽヽヽ大層お暑いことでございます、落合様へお見舞に入ッしやるのでございますか、親分さんのお怪我は、飛だ事でございまして子エ……

お徳は其方に向ひてチョッと挨拶して

お徳「小母さん、毎度お尋ね下すッて難有うお陰でモウ餘程好い方で……落合のお嬢さんもお快い方で、何寄結搆です子エ……

長太は目を擦りながら

長太「阿母ア、お前お話を仕ながら釜の下を燃すから煙ッて不可子エ

お徳さん、イヽエ、お嬢さんのお相手は私がするから、お前は早く湯を沸して、其湯で手巾を絞ッて、奥においでなさる松本さんとお嬢さんにお上げ、汗を吹くのは水より湯の方が好ッて、庄官様へ見える、片桐先生が言てゐらしつだから……

お捨「ハイ〳〵畏りました、お嬢さんアノ通り、親に向ッてもボン〳〵申しますオホヽヽヽ

お徳「長太さん、落合のお嬢さんは、大層お快ろいといふ事だが夜分もお樂にお寐り遊ばすやうに成たの

長太「夫が不思議なので、アノ片桐先生のお藥でも、効能の見位なかッた、御病氣が、アノ、モシ、松本さんが、お夜伽を爲さるやうに成てから、日増しに、イヤお嬢さんのは夜増しに、夜増しに快く成て、今日

ではモウ七八分御全快で、其代り松本様ゃゃで神様よりお醫者様よりモット貴重がつて、お嬢様の事は何でも彼でも、松本様任せ、旦那や内室さんは素より、アノお嬢さんも、松本様で無くては夜が明けねへので、侍女のお松どんまでが貞之助様を……

思はず高聲にて言ひかけて、フト氣がつき、奥の間を白眼て急に聲を低め

長太「アノ様子では、何でも、お嬢さんは、松本様に……イヽエ、お松とんが、言てゐたので、然ー松本様はお堅いお方だから少ーも可厭らーい事は無いので……イヤ可厭ーいと言へば花菱の親分イヽエ、お前さんの阿父さんと喧嘩をーた彼奴、イヤ彼奴ぢやア無エ、會津の野郎め、お嬢さんに恍惚ッてゐやアがつて、田淵の藪醫者をお先に使ッて居るシでさアね、アノ俵庵め、旦那にお目に懸りに出るから、松本様の留守の時を内證で知らーてくれつて私に七くどく頼のサ、此間も天保の二枚も袖の下を遣やアがつたが、其様な事が、跡で旦那に知れると大變だから、驅逐けて行て叩ッ返ーて遣たが、今思ふとソット貰ッておいて、鶴子餅でも買て喰やア好ッたッけアハヽヽヽ

長太は已が心の朴直なるより、耳に聞けるだケ、否心に思ふ程をありのまヽに言ひ出れば、お德は父の市五郎と藤五郎の喧嘩の事が落合の家に聞えをるならんと心に係れば、之を幸ひ探問ふて見んと尙も言を和げて

お德「長太さん、お前は正直で、何も彼も隱さないで、能く話ーておくれだが、落合の旦那様は、アノ藤五郎と阿父との喧嘩の事を委ーく御存知か、お前知ておいでかへ

長太「夫はアノ……お嬢さんがアノ通りの御大病だから、アノ喧嘩のことも皆ナ遠慮ーて旦那にも内室にも、別段話ーたものは無

ねば直那はドヽまして徒を捨て入つ〜やる〜小前の者も多勢出入するものだから、誰かに聞いて、薄々は御存知の様子だが……夫に藤五郎が花菱の親分に喧嘩を仕掛けたのは、親分が庄官様へ御出入をする事に就いて、意趣を持て夫で……

話〜かけ〜折から奥の間よりお捨の聲にて

お捨「コレ長太花菱のお嬢さんを此室へお伴れ申〜な

長太「アイ……お嬢さん今云た事を松本の若旦那様に云ては不可ませんよ、ソシテ脩庵坊主の天保錢の一件も

お徳「オホヽヽヽ妾が何で其様な事を……

長太「ヂヤア、後で又藤五郎の話〜を〜て上げやせう……

お徳は松本の前へ出ることなれば更に衣紋を繕ひつヽ、手に持てる扇にて差かゝさうに暖簾を分けて内へ這入れば、長太は身を起〜て軒に立たる鼓簀を日中りの強きところへ建替んと立寄りたる門口の雪隱の戸を開けて、内より立出る一個の男

男「オイ兄イ、手洗鉢に水が旱魃だからチョッと一杯掛けてくんネ

エ

長太「アイ……オヤ、人に水を掛けさせて、お前さん、何處を見てゐるンです

男「ウン、已か……お前の宅は風透きの好さゝうな建築だなア

第十回

宮城の松本が勝沼へ赴きたると、同日の事なるが、田淵脩庵は久々にて落合方へ尋來り、客室の椽端近き處にて三郎兵衛と對座ひ

落合「先生、お暑いのに能うこそ、實は今日、長太が内に居たら、チョットお迎ひに出す心算で有たところで……

脩庵は會津の藤五郎に緣談の事を迫られて、一旦謝絶られ〜病家へ、聊か間は惡るけれど慾に誘はれて押て出來りたるが、落合が思ひの外の

機嫌にて、加之迎ひの人まで出さんとせ〜慮なりとの、懇切なる詞を聞きければ、心の中にその好都合を喜びながら、曾て長太に、松本の不在を知らゝてと頼み聞えたる事あれば、モシヤ彼より何か聞たる事のありてかと疑ひつゝ、例の輕卒なる調子に一段勢ひを添へて、額にて三郎兵衛の顔を眺みながら

田淵「アノ長太……アノ長太が何か……

三郎兵衛は沈着たる口吻にて

落合「イヱ、余が貴老に少〜お話があるので……

田淵「ハーン、然らば過日愚老が途中で申〜上げた、御合嬢の御病氣の醫案に就いての御用ですか

落合「嬢の病氣はお陰で、餘程快氣に赴きまーたから、最早先生の御配慮を願ふにも及びませんが……

田淵「夫は何寄結構な事で、實は愚老もその御本復を、イヤ御本復祝ひの御宴會に就て、愚老に例の御周旋を、何か新奇な茶番の趣向でも

落合「マア、先生、万望余の申す事をお聞き爲すッて……アノ近來鏡中條の上總屋に滞留〜てゐる、會津の藤五郎と云ふ俠客と御交際ですか

脩庵は三郎兵衛の返答が着々已が所思と違へば、少〜く方針を失ひ細き目をーぱたゝきて、心に驚慌を來せる折から、此の意外の一問を喫〜ければ、其吉凶を謀りかね、如何に答へて好からんと暫時口籠り〜が流石世事にい老練たれば、得意の摸稜の手を廻ら〜

田淵「エヽ、アノ親分とは知らぬ中でもございませんが、格別懇意にするといふ程の事も無いので……

と孰ら附かずの返辭を爲〜つゝ、又も額にて落合の顔を睨みゐたるが三郎兵衛は莞爾に

落合「イヤ、お馴染でさへあれば、別段御懇意で無くても好いので、實は内々で貴老にお願み申したい事があるので……

俺庵は落合が内々でお頼みが有るといふ口吻の頗る温和なれば偖は首尾惡ろき事にはあるまじと早くも察しければ、忽ち機に乘じて

田淵「イエ、愚老も少し御相談があるが、アノ藤五郎といふ俠客は尋常の博徒と理が違つて、舊は尾州藩の武士の子だとかいふ事で、武藝は勿論、少しは學問も有るから能く物が判つて、慈愛心が有て年齢が若くッて、標致が好ッて、言語が好つて、何處へ押出しても華美な人間で……十五の年とかに本曾街道の何處とかの驛で、其處の俠客のお祝取の鬼龜といふ男と喧嘩をして、華々しい立引きをしてゐる處へ、會津樣の元々がブリで通り合せ、その喧嘩を仲裁して、藤五郎親分の膽力に感心して十四や十五で、此位の度胸が有れば、將來頼もしい子僧だと、すぐに會津へ連て行て自分の養子にしたので、夫で綽號を會津と云ふさうだ、何か都合が有て二三年前から、此甲州へ來たが、今申す通りの珍しい人物だから、忽ち賣出して、今では甲州切てどころか、東海道は駿遠參水曾街道は信州上州、越後路へかけて、會津と言ては誰知らぬ者の無い立派な俠客で、當時ちやア子分の……左樣さ、一百もあるといふ評判です

と調子に乘て、暗に藤五郎の勢力を誇張れば、三郎兵衛は何か點頭きながら傍に置きたる小文庫の内より、二分金を幾個か取出して紙に包み手早く上にノシお菓子と認め

落合「先生、是は失敬ですがお菓子の代りに……

と煙草盆の側に置けば、俺庵は眉を皺め

俺庵「エ、へ、、、、、、旦那、是は何でございます、今日は愚老が勝手にお見舞申したのに、丸樣な御心配では恐入ります

落合「イヤ、左様仰しやる程の品では無いので、時に今の御話では藤五郎といふ人は能く物の判ッた人だといふ事ですが、その物の判るところを見こんで少しお頼みがあるが、先生お前さんの御盡力で……」

と云ふを遮りて俙庵は獨り早合點して

田淵「親分にお頼み……ナニ譯はありません、貴君のお頼みと申せば、イヤお話が整へば差詰め愚老は媒、イヤ中に這入ッた甲斐があるといふものです、ソシテその御相談は

落合「苟且にも一村の撿束をする身分で、此樣な事を申すのは、異なものだが、此事は貴老の御盡力次第で出來さうに思はれるので……」

俙庵は愈々言を早め

田淵「兎も角もお話あそばして、何も貴君公邊向きにかゝるお話ではあるまいし、假令何のやうな事でも、先方は會津の親分、此方は落合の旦那、其仲裁はチト烏滸がましいが、此く申す田淵俙庵、エヘヽヽヽ、何のその岩をも通す桑の弓、ナーニ譯はございません

落合「實は別の事でも無いので、豫て御承知でも有うが、アノ藤五郎と花菱の市五郎と喧嘩の一條で、知ての通り、市五郎は余の方へ出入の者、夫に内々聞けばその喧嘩の中へ這入ッて、市五郎の腰押しをしてゐるのは、余の方に滯留してゐる松本さんださうだが、アノお方は少し仔細が有て、アノ親御から、余に托けられてあるので、万一の失措でもあると余が預けられた親御にすまんから、市五郎にも若イヤ松本さんにも聞かさぬやうに、事を穏便にすませたいので、何と先生、余の爲めに、藤五郎に其譯を話して藤五郎の顔には少しは關係るかも知れないがソコを枉げて、好程くすましてくれるやうに頼では下さらぬか、若し此事が平和に納ッたら、又改めてお禮もいたすから、此の一條は双方の事情を能

く知てゐて、ソシテ角の無い人で無いと扱ひが仕憎いので、何分貴老を勞ばすから……

と又も意外の頼みの言に、脩庵は少〳〵不意は打たれたれど此の頼みを幸ひ、藤五郎を説附けて、彼の立引を穏便に濟ませ、其上にて藤五郎の頼みを否應無〳〵に三郎兵衛に承諾と云はせんものと、心に喜びつゝ

田淵「如何なお頼みかと存知たら彼の喧嘩の事でございますか、エヽ宜〳〵うございます、醫は仁術なりとある以上は、人の病氣を癒す許りか、世間の煩悩を救ふのも職掌でございるから、愚老の頭顱の如く、圓く納るやう、屹度骨を折りませう、さる代り……

と言ひかけて折から勝手の方に雪駄の音聞へて下女下男が聲々に

「オヽ、松本様お歸り……

第十一回

牛田村を少〳〵出離れ〳〵田圃路を、會津の子分の樗蒲皿と病犬が連立ち

て

熊吉「オイ源十、何をぼ〳〵してゐるのだ、歩かネエか、往還上へ蹲踞ンで腹でも痛へのか、氣が利かネエ

源十「待テー、熊喧〳〵く言ふなイ、格外彼處で、長い間雪隱で、籠城〳〵してゐたもンだから、足が麻痺れて……此の暑いのに、臭へ思ひをするのも、戰國の習ひ、此處が間者の役だと、鼻を摘ンで我慢は〳〵たが、蝨蚊と馬蠅に刺れて、コレ見ネエ、兩方の足は鹿の子だ、イヤ鹿子と云へば、黒繻子と鹿子の腹合せの帶を〳〵め、越後の帷衣を着た姿は、實に上玉だ、花菱の娘は遠沼一だといふ評判は、虚ちやア無へ、三吉が此春まで馴染ンでゐた、甲府柳町の狐に横顔は大層能く似て居らア

熊吉「可愛想に、アノ娼妓よりやア、お徳の方が、十段も上だア

源十「オヤ、汝は名を、知テるな

熊吉「アハヽヽヽヽ娘の名ですぐ蹠が立やアがッた……時に汝は何で雪隱に籠城ッて、臭へ耐忍をッてゐたのだ

源十「今日、敵の樣子を探らうと思つて、遙沼の近所まで往たその歸りに、あんまり涼ッいので、八幡の森の社殿の蔭で、暫時午睡をッてゐると、何だか人の話聲が耳に入ッたので、フト目を覺ッて樣子を伺ふと、花菱の子分の八反田と、娘のお徳と、落合の居候的の、例の松本といふ武士と三人が、今からお吉の茶店へ往て、緩々相談ッやうといふ段落で、演劇なら舞臺をブン廻すところなのでコイツ占めたと考へて、森の中の間道から、一歩先へ馳拔て、三人より先に廻ッて、ソラお吉の内の西手に、汚穢へ雪隱があるだらうアノ雪隱は茶店とすぐ密着いてゐるから、彼奴等の話は、十分聞えるといふ考へで、一生涯の智恵を奮ッて……

熊吉「汚穢へ智恵だなア、雪隱で立聞とは

源十「ァァ、混ずに聞ッ―、突然雪隱へ飛込で、今や遲―と待てゐると、卽て三人は遣て來たが、松本と丑松は奥へ這入ッて床几に腰を掛けたのはお娘だけよ、ソコデ、思ふ計略圖に中りなら好いが、いさゝか圖に外れと來たので、責めてお娘のイヤお徳の顔でも見て遣うと思ッたが、月に浮雲花には暴風で、アスコの店の長太めがお徳さんのお顔へ、夕陽が當るからと吐ッて、餘計な世語に、拔賣を立懸やアがッたので、夫も失望よ

熊吉「好い〳〵、此處長太大出來〳〵、

源十「何だ面白くも子ニ、人の憂ひを喜びやアがッて

熊吉「お徳の顔が見え無く成たのが人の憂ひも仰山ぢやア無エかアハヽヽヽヽ

源十「イヤ笑ひごつちやア子へ、夫からモウ眼の方の用は無へから一心に鼻イヤ耳を澄ッて、奥の松丑の相談を聞うとすると其話い

聞え子ェで、店のお徳と長太の話が耳に入ッたが、ナァ樗蒲皿…

熊吉「何だ敢ッて、人の名を呼びアガッテ

源十「アノ長太が、お徳に話しの様子ちやァ、親分が彼程思ッてゐる娘はナ、疾うから落合の居候的の松本といふ奴……

言ひ懸け〜折から熊吉は源十の袖を曳けば源十は話を止めて

源十「熊何だ

熊吉「何でも無へが、背後から誰か呼ぶやうだから

源十「呼ぶ好は誰だらう

と病犬と樗蒲皿が一齊に振返れば、田淵脩菴が片手に汗を拭ひ、片手に扇子を半開きにして、頻りに兩個を招きながらチョコ〜歩みにて進み來り

田淵「オイ〜お前方は若い癖に耳の遠い源さん熊さんと先刻から幾度呼んだか知れ無へ情婦の談話でもしてゐたと見えるねァ

熊吉「アハ、、、、、田淵さん御機嫌で、何處へ行なすッた

田淵「愚老か、愚老はお尋ね迄も無く病家廻りサ

源十「フンなど、眞面目な顔をして、又田地の質入の周旋だらうアハ、、、、、

田淵「中らずと雖も遠からずアハ、、、、、時にお前方は何處へ

熊吉「病犬は雪隱へ

田淵「雪隱……氣味の惡い此節流行るトンコロではないか、おうれべ〜

源十「何だ緣起でも無へ少し雪隱には緣はあるが此方は相思病だ先生の匕頭でイヤ舌頭で癒して貰ひてへのだ、然し相手が相手だから、少し如何かと思ふのだ、夫に當人同士に紛紜は無へが、親と親分が妹脊山の段で、御中不和の關となりだから……

田淵「アハヽヽヽ流石は親分の子分だ
熊吉「親分の子分とは……
田淵「イヤ婦人の周旋には凝り〳〵したといふ事サシテ其相手は…
源十「誰でも無へ花菱の娘のお徳だ
田淵「ナニ花菱の娘だと、夫は不可ン〳〵、比頭でも舌頭でも彼の一條が濟まん内は迚も不可ン、夫よりは花菱の一條について愚老が親分に少〳〵込入ッた相談があるが、その事に就いて子分の衆に不承知があると困るがお前方は、多くの子分の衆の中で屈指のイヤ親分の手足とも、四天王とも云はれる人達だから愚老の意見について親分から相談の有つた時、不承知を云はないやうにして貰ひたいのだ
源十「ソリヤア先生の頼みの事だから隨分こと、品に寄ッたらナア
熊吉「サウよ、ソコハ詠と歌だア
源十「魚心有りやア水情だ
田淵「アハヽヽヽ猪名川土俵で逢はうと芝翫で行きたいところだイヤその土俵際で事を打破すと大變だから、お前方に先へ話すのだが
源十「ダカラ、今云た一件を
田淵「歌と魚心か、お徳嬢のことはマア後段として、此うしやう今から何處かへ行て、立入たお話しだが、愚老が散財で、一口進ぜることヽしやう
熊吉「こいつは珍らしい、先生が散財るとは
源十「何かよく〳〵廿エ仕事でも有たと見える
田淵「イエ、ナニ、然ういふ譯でも無いが、今日は落ナニ今日此處でお前方に落合ッたのは頗る妙だから急に奢りたく成て……コー

と何處が好からう、手輕でチョッと飲めるところは

熊吉「とても御馳走になら、手重の方が好いなァ

源十「然ー手重では先生の比では……

田淵「東西々々船中にて左樣の事は申さぬ者にて候ふ、源さん何處へ

お神輿を据ゑやう

源十「サウサ、同じくは、密貫淫の居る内が好いねへ

熊吉「極り言テやアがらア、先生病犬の好色に搆はねへで、寧そ相撲屋

は如何だ

田淵「鏡中條の……チト大仰過るがチョッ此うなりやア糞燒だ仕

方が無へ糞燒けで思ひ出したが、源さんの雪隱の一條は如何な

事です、孰れ鼻持ちの成らない話でせう

源十「處が花菱の子分の丑松と落合の居候的の松本が大事の話をー

てゐるのを、嗅ぎ出す、イエ聞出す爲めに、雪隱へ立籠ったので…

田淵「ナニ松本と丑松、夫りやア耳寄な話だ、ドゝ如何ナ話ーをーてゐ

たのです

源十「夫が聞りやア譯は無へのだが

熊吉「お德の聲に許り聞惚てゐやアがるもんだから、カラッキシ意氣

地は無へので……

此時脩庵は扇を襟に指ー、両手を懷中へ入れて、落合より惠まれー封金

を探り、密かにその圓數を算へてゐたるが、源熊は夫と知らねば

熊吉「何だ先生、此暑いのに懷手をー、て、顏を皺めて……

源十「人の事をコロリか何んて言ひながら自分が醫者の不養生で腹

痛か

田淵「イエ、チョッと孰れ腹の痛む譯だが……イヤ大丈夫だ是なら

源十「モウ癒ッたのか早へなア

熊吉「ドウーても餅は餅屋だ

田淵「イヤ餅屋より酒屋へ急がう日が暮れない内に……

第十二回

梳髪

落合の娘お絹は、宮城の松本の丹精にて、さーもの難病も今は全く癒ければ、三郎兵衛夫婦の歡び一方ならず、今日ーも床揚げの内祝ひをするとて、お絹は久ゃにて、氣に入りの侍婢お松に髪を梳せつゝ、心隈無き交際ひとて、互に談話もうち解けて

お絹「お松、大層毛が抜けたやうだネェ、然ーー久ーー振りて櫛を入れたのだから洒然ーて實に好い心持に成たよ

お松「イヽエ、思ふ程にお抜けではございませんッシテ少ーー位ねお抜け遊ばーても、元來濃過るお髪ですから、一向目立ちません……お嬢樣へ、今更申すまでもございませんが、貴嬢の御病氣が如此に早く御本復遊ばーたのは、全く松本樣の御丹精でございますよ、オホヽヽヽ若且那樣の事を申すとすぐお顔を……オホヽヽヽヽお隠ーー遊ばーても、鏡が正直でございますよ

お絹「オホヽヽヽ然うでは無いよ、久ーー振りで、櫛を入れたのでッィ逆上せたのだよ

お松「夫はマア然うとーて、お嬢さま、先刻若且那は貴嬢に何を仰ーやッたのでございます貴嬢はさもお嬉ーさうに、ハィ〳〵とお返辭を遊ばーて……

お絹「アレハ何だよ

お松「オホヽヽヽヽ又笑つておいで遊ばすよ、サア仰ーやれ仰ーやらないと妾は髷を曲て結ひますよ、オホヽヽヽ

お絹「ダッてアノ……

お松「何と仰ーやいまーた

お絹「アノお前の病氣が快く成たら、お前に是非お話ーがあると仰ーやッた許りで、外には何にも仰ーやりはーないよ

お松「虚々、尚他に何か仰ーやいましたらう、お陰ー遊ばすな、妾のチラッと承はッてをるのでは、且那様も御新造様も、貴嬢の御一身はアノ若且那にお任ー遊ばーてあるので、若且那も、アノ……貴嬢の御本復遊ばすのをお樂みに、アヽーて骨肉も及ばない、御介抱を遊ばーたのだと、いふことでございますから……お嬢様貴嬢はさぞ御本望でございませうネェ、オホヽヽヽ

お絹「何が……本望とは

お松「何がと仰ーやッて如彼なお優ーいお方とオホヽヽヽヽお動き遊ばすと、折角寄せた髪の根が……

お絹「オホヽヽヽ人の事を言ひながら、お前だッて若且那のお噂で手許が御留主に成て、アノ、マア、嬉さうな顔

お松「何時妾が

お絹「何時ッて、夫御覧、此鏡には妾一人では無いよ、お前の顔も寫ッてゐるから

お松「オホヽヽヽ可笑しい事を……何で妾が……可笑ーいと申せば、アノ藪醫の田淵が、此間久ーぶりでまゐりまーて、妾に向ッて……憎いぢやアありませんか、若且那の事を呼附けにーて……松本は不在か、夫は恰度好い、お絹さんは如何ぢや、追々好い方が、快く成たら少ー話さんならん事があるなんテ、貴嬢と若且那の事を、否に尋ねまーたから、妾も腹が立て、彼奴が歸ッた跡で御新造様に、すぐ其事を告白けてやりまーたら……

お絹「阿母さんは何と仰ーやッたへ

お松「アノお絹の病氣の快く成たのは、松本様のお蔭だから、何も田淵さんの知た事ではない、夫に松本様から、彼娘が本復ーたら、何か御相談があるといふ事だから、彼娘の事は誰から何と言て來ても……アレ其様にお點頭き遊ばーては、根が下ッて仕舞ます

よ、モウ若旦那の事は申しませんから万望屹然と遊ばして……

お絹「何も妾が若旦那の事を……

お松「尚其様な事を仰しやいます、世間には親御さんが御不承知であるのに勝手に不義淫奔をする娘さへありますのに貴嬢何ぞは御両親が御承知なればこそ、アヽして何も彼も松本様次第……

夫に過日勝沼の花菱のお徳さんがお見舞に來た時、御新造様がアノ娘を御覧遊ばして、お絹も早くアンナ髪でも結ふやうに成たら旦那様と御相談申して若旦那に……

お絹「お松、今お前若旦那の事は云はないと言たぢやアないか夫よりは、アノお徳の處の市五郎も病氣だと云事で有たが、如何な容體だか

お松「ハイ彼は人に斬……イヤ人に聞きましたら、怪我をいたしたとか申す事でございますが、お徳さんの話しでハ、モウ餘程快い

様でございます

お絹「さうかエ、昨日内へ來て居る長太が、大きな聲で、鏡中條に居る藤五郎といふ人と、市五郎は喧嘩をして、近日に其談判の仕直があるとかいふて居たが、實説かへ

お松「アノ長太は何を聞いて來て饒舌か知れやアしません、サアお髪が出來ました、御覧遊ばせ前髪はお自身でおとき遊ばせ、お髪が出來たら、又格別お美麗くなッたを早く若旦那に御覧に入れたいものだオホヽヽヽッヽ、又若旦那が出ましたお簪は孰を……

如何な時に松本様からお土産にいたゝいだ、アノ裏菊のお釵があると好いのに惜しい事を遊ばしました……

お絹はお松の此の語を聞きて何か氣にかゝる様子にて低首いてゐたりしが、折から彼方の一室にて母のお繁の聲にて

お繁「お松や鑛の髪が出來ましたら一寸此處へ

お松「ハイ唯今……お嬢さまへ方一今のお話でございまーしたら御遠慮なさらないで、耻かーがるも時によりますから、好うございますか、確乎爲さらないでは不可ませんよ

第十三回

謝罪狀

鏡中條村なる上總屋の一室の内には會津の、藤五郎が乾兒の、甄弄物の三吉に、大團扇にて扇がせながら、少ー眉尻を揚げて、幇間醫者の田淵脩庵に對ひ

藤五「先生、貴老の云ふところも、一應は尤もだが、過日の晩の花菱との出入りは、市五郎の腰押のア！武士が始めから落合の寄食者と判りやア何もアンナ穏和な談判をするンぢやア無ッたが、全く日延の談示を纏めるまで、松本といふ事を知らなかッたもんだから……夫後も貴老が急いでは事を仕損ずるから、短慮は功を爲さずだから、マア然う云はずに愚老に任せてお置きなさい

屹度惡いやうにやアーないからと、能く廻る舌で言ひくろめるので、此方も懇にやア弱へもんだから、然うかく と言て今日まで何だ彼だと云て、市五郎の方へ返事の延日をーてゐた上に、又貴老の云ふやうな事をーては實に耻の上の辱だから……

田淵は右の手を振て押ゆるが如く之を慰め

田淵「マアお聞きなさい、親分、愚老の云ふ事を、篤りと、元來過日の晩の花菱との喧嘩も、其根を洗つて見れば、落合の娘をお實ひなさりたいのが、原ぢやありませんか、シテ見れば、縱から行ても、横から這ても、アノ娘さへ此方の者にすれば、夫で親分の顔も立ち、又望みも遂げられるおやア有りませんか、親分に向ッて如此なことを云ふのは、楠正成に向ッて兵法を説くやうなものですが姑く與へて之を取といふのは、孫子の秘術ではございませんか、此處は一番親分がその孫子の秘術に基いて、當然なら落合が、アノ松

本といふ二歳を保庇ふのを附込で、松本の命が惜けりやア娘を呉ろと弱味に祟る厄病神と出かける處ですが、夫ぢや演劇の敵役同様で、餘り時代で色も艶も無さ過ぎて、會津の藤五郎とも云はれる、親分の所爲でありませんから、ソコを案外に平和に出て向ふの所望の土を超え、十分満足を與へて遣ッたら、その清潔な仕向けに眇いて、イヤ温厚ーい了簡に感心ーて、流石は立派な侠客だと、三郎兵衛夫婦は言ふまでも無く、一家内舉ッて賞るは必ッ定シコベ愚老が附込で、サテと一番談じこんだら其時こそは否應なー、二ッ返辭で談話の纏るは保証の西瓜、モシ此見込が間違ッたら、愚老の坊主頭でも献上ーます、ナニお前さん、娘さへ嫁に貰へば、落合と親分とは言ふまでもない婿舅、然う首尾好く事が纏れば、花菱は落合の出入りの者、松本は勿論彼家の寄宿人、市五郎に草履を直させうと、貞之助に肩を揉せやうと、總て親分の御意次第、一旦敵へ與へた針小の喜びを、何日でも棒大にーて取返せるではございませんかァハ、、、、

藤五郎は脩庵の此の言語を聞き、稍暫時考がへて

藤五「サア此間から、熊吉や源十も、其事を已に話ーて居たが、假に貴老の意見に附くとーて、花菱へは如何いふ返事をする目的です……

脩庵も同じく沈吟に時を移ー、藤五郎の顔をヂット見詰めて

田淵「左様……其處がむづかーい處で……マッ……アノ花菱

藤五「ナニ一札を

と松本の両人に當てチョッと簡短な一札を入れて……

田淵「サア、其處が孫子の兵法で……縱令一旦書附を入れてもお前さんが、お絹坊ィ、ェ落合の婿にさへなれば、其書附を取返すのは小兒の腕を捻るよりは今一段譯の無い話、イヤ取返す迄も無く、先方から低頭平身ーて返ーにくるは知れた事です、一旦の恥

は末代の光り、韓信が市人の股を潜ッたのは此處の道理……
末つひに海となるべき谷水は去ばー木の葉の下くゞるなりア
ハヽヽヽ所謂大功は細瑾を顧みずです、此事は兎に角愚老に
「お任せなさい……

藤五郎は俠客の意地理を非に曲げても勝を制ーたきに、況ーて敵に向
ッて謝罪一札を入れよといふ案外千万なる脩庵の勸告なれば、滿腔の
不平溢るゝ程なれども、項王が山を拔く力も、虞氏が爲めに折るゝのな
らひ、その目的はお絹にあることなれば、何事を爲すもお絹を得るの手
段なり、目的さへ遂げ得るならば、その手段の可否は姑らく問ふところ
にあらずと、自から思ひ返ー、さーもの勇氣も痴情の爲めに抑へられて
少ーの働きも爲さず、卽て苦笑ひーて

藤五「先生が夫程に云ふのなら、隨分外聞を恐へ子エでも無へが、モシ
夫程にーた曉に、万一お絹を手に入る事が出來なかッたらば…

田淵「仰ーやるまでも無い、最前も申す通り、此の愚老の西瓜頭を……

藤五「イヤ苟且にも命を賭て爲ると云ふことなら、奇麗にお任せ申ー
やせう、シテその一札の文言は

脩庵「左樣……此に三吉さんを置て云ふのは變なものだが、茂九さ
んと忠次さんと三吉さんは……今に行在の判らない事にー
て……三吉さん是も親分の爲めだから、此の一條の濟むまで
暫時あんまり外へ出ないやうにーて、夫とも親分に小遣を戴い
て、三人同伴で江戸へでも遊びに行てくるとも、ソコは御勝手だ
がソコで三人の者の所在の知れ次第引戻ーて其方へ引渡すが
……

三吉は側より口を尖らー

三吉「先刻から默止ッて聞いてゐれば脩庵さん、何程親分の爲めだか
らッて……

俙庵は之を遮り

田淵「コレサ〳〵、今も云通り何をするも親分の爲めだから、暫時の辛抱を〳〵て貰はなければならない折角の妙策を、内部から火を出〳〵ては、千日に苅た萱だ、親分の顔の立やうになれば、自然お前方の顔も立つ道理だから、此處は一番目を瞑ッて、イヤ口を閉て、ドウゾ、愚老に任〳〵ておいて下さい……エ、ソコデ、子分の過失は親分の過失だから、夫迄の間は拙者が三人の者に成り代ッて……

藤五「アヽもう大体解かりやゝた、此方の顔にも係らないやうに、先方も承知をするやうに、一番智慧を振ッて、一札の下書を書て見て下さい、是は當坐の骨折料だ

と腹掛のかく〳〵より一分銀を幾個か握み出〳〵て、紙に包ンで俙庵の前に置けば俙庵は坊主頭を忙〳〵無く掻いて

田淵「毎度是はエヘヽヽヽ、

第十四回　菱の花（上）

甲斐國勝沼驛は甲府街道にて尋常の旅客は更にも云はず身延山參詣の法華信者、千ケ寺參りなどの往來常に絶間なくいと賑〳〵き土地なるが此驛の中央に花菱と云へる料亭あり、家主の名を市五郎と呼て、此近郷にて有名の俠客なるが先夜同じ俠客仲間なる會津の藤五郎と口論の末、夫が乾兒の者に疵を負はされ〳〵が、最早八九分の全快を告げ家内だけは床揚の祝ひをも濟せけり、此市五郎に本年十七になるお德といへる娘あり容貌愛は〳〵く性質賢〳〵く殊に愛嬌人に優れて、能く客人を待遇〳〵ければ主人の俠氣と娘の評判の二ッにて日に増〳〵家業の繁昌を加へけり、一日の晩景市五郎の乾兒の頭類なる糸鬢の梅太は巳が身体より一倍も長き竹箒にて門前を掃除〳〵ながら、手提箱に誂への肴を入れて内より携さへいづる、同じ乾兒の暗りの鍬藏に向ひて笑ひなが

梅太「ヲイ暗り兄ィ、又女に見惚れて、鉢を破ーちゃァ不可へぜ、親分が病氣だからッて使ひに出る度に油賣ってちゃァ悪いぜ……愚弄が如き調子にて言ば暗りは口を尖らーて

鍬藏「生意氣な事を吐すな、餓鬼の癖に人のことより汝こそ馬の糞を殘さねへやうに、綺麗に掃け、姉御にィヤお德さんに叱られるぞ

梅太「ベランメェ、汝等の指揮は受けねへのだァ、ソラ脚下に犬が……

……ェ、尻尾を蹈みやァがッた、氣の利かネェ、樣ァ見やがれ……

……元來汝の名と丑松兄ィの名と、名を取交れば好い、汝の名の鍬藏は八反田に恰是好くッて、丑松と云ふのは暗りに附物だァ

アハ、、、、

鍬藏「馬鹿ァ言へ己の綽號の暗りといふのは狩鞍といッて馬に乘ることが上手だから、夫でつけたので暗いといふことぢゃァネェのだ內の親分の子分に由緒の正ーいものが幾個も有るが丑松兄ィ何ぞも、田地を八反持てゐた、相應の百姓の息子が、その田地を皆ナ博奕で負て仕舞ッたから、夫で八反田といふのだ、その中に又汝のやうな屑も有らァ、此間まで信隆寺の小僧でダ、ブダブ〳〵と言てゐやァがつたのが、今ぢゃァ髷を結て糸鬢よ、己何ザァ此う見ても天下の御家人だァ

梅太「フン立派な御家人が、その樣ァ何だ、馬の手綱の代りに、手綱染の三尺帶を締めて、鎗の代りに提手箱を以て……

鍬藏「ウヌ此の坊主還りめが、アヽいへばカウといふと、惡まれ口を饒舌やァがッて打き擲るぞ

と既に口論が腕力に及ばんとするを料理場にゐたるお德は此の聲を聞き附ーが庭下駄のまゝにて暖簾を押分け

お德「コレ、梅太又門口で騒ゥーい、暗りも大人氣ない小兒を相手に何

を言てゐるの、早く出前を持て行かないと、お得意から尻がくるよ梅太は愈々圖に乗りて

梅太「リアーイお嬢さんに叱られやァがッたリアーイ……

お徳は愛嬌なる目尻を聊か釣上げて

お徳「コレ又そんなことを……

鍬藏はお徳が鶴の一聲に返す言語も無く誂への肴を持て急ぎ行く梅太は門掃除を終へて竹箒にて鎗持の真似をしつゝ内へ這入りし跡へ南部笠にて面を隠し白地の薩摩の帷子に黒絹の羽織青竹の献上博多の帶を締め、黒塗鞘の兩刀を落し挿しに爲し、開きたる唐扇を片手に持て、袖口より風を入れつゝ、歩み來る武士の姿を、お徳は遠目ながら夫と見とめて笑顔に一段の愛嬌を添へて出迎へ

お徳「オヤ松本様お暑いのに好うこそ

と言へば武士は笠を取り

松本「阿徳さん、市五郎さんは

お徳「ハイ内に居ります、サアお通りなさいまし

とそのまゝ家内へ誘引へば市五郎も出迎へ

市五「若旦那好く入ッしやいまし、たゞ、實は急に御相談申したい事がゞ

ぜへやして丑松の野郎を牛田までお迎へに出したところでし。

たドウゾ此方へ

と風透きの好き奥の一室へ通し鮒の刺肉か何彼でチョッと一杯侑めながら、市五郎は松本の顔を見て

市五「若旦那今日は如何いふ御用事で……

松本は眉を皺めて

松本「市五郎少し合點の行ぬことが有て出て來たのぢやが藤五郎から其方へ何か申してまゐッたか

市五「會津からですか……貴君様の方へは

松本「今日田淵脩庵を以て穏密に……

市五「ヂャア若旦那の方へもヤッパリ謝罪狀をアノ藪醫者の手から

松本「貴公の方へも參ッたか

市五「サア實はその事で貴君の方へ丑松を……アノ負ぬ氣の會津の野郎めが五日の日延を貴君に願ッたのさへ妙だのに、其後も二日三日と日延をしてトゝの結局に俠客の顏の穢るのも世間の耻も撈はねへで謝罪一札を入て穏便に事を濟すとはドウも合點が行きやせんので中々一條繩では行かぢへ奴ですから是にやア何か深へ子細のあることだらうと考へられるのですが、吾等の智恵ぢやア思案が屆きやせんから夫で貴君のおいでを願ッたので一時此うして油斷をさせて其上で不意を打つ目算でせうか但は又他に何か計略があるのでせうか、貴君のお考へが承はりていので……

松本「余も藤五郎の仕方があまり案外なので少し考へた事もあり又聞いた事も有り夫に就いちやア少し相談して見たい事も有て何や彼やを兼て出て來たのだが……

と言ひかけ〻折柄此家の娘のお德が壜子を携へて出來り

お德「お燗の好いのとお取換へ申しませう

第十五回　菱の花（下）

丑松「親分今歸りやした

市五「オヽ八反田か暑いのに御苦勞でッた、恰是若旦那と行違ひで其に殘念な事をした

丑松「私も落合樣へめへりやしたら松本樣は今がた他へお出かけに成たといふので推して、御樣子を伺へやしたが如何も判りやせんので多分此方へでもおいでになりやしたのだらうと考へて急いで歸りやしたが、少し都合が有て、お吉の茶店へ寄て暫時話

まてゐやーたので、大きに遲くなりやーたソシテ若旦那は

市五「今お歸りに成た

丑松「夫は殘念なことをーやーた爾うーて彼の謝罪狀の一條は……

市五「サア其事で今お目出度と話ーてゐる處だが己の察ーの通り、松本樣の方へもアノ田淵めが矢張一札を持て行たさうだ

丑松「フーン、ソシテ若旦那は何と云ておいでなせへやーた

市五「若旦那のお考へも、己と澤山は違はねへが、若旦那の仰ーやるには生もアノ晩汝の疵を負ふてゐるのを見たのと、藤五郎の子分の卑怯な舉動を聞いたところから、平素の疳癪に觸つて、氣の毒やら、腹が立つやら、突然に弱者を扶ける氣に成ッてすぐ汝の腰押ーをーて、血氣に任せてアンナ事をーたが、跡で思へば已も親のある体殊に今では預けの身万一の事でも仕出かーては親にも劬勞を掛ける許りか、肝心世話に成てゐる、落合の職掌にも關係ることだから、實は穩便に事が濟めば夫に增ーた事はねへの、だがアノ會津の藤五郎といふ男は一條繩ではいかぬ奴と聞いてゐるに此方から望まない謝罪狀まで書いて、苟且にも醫者の俯庵を使者に寄來すとは、チト温厚ー過ぎて氣味が惡るい、エヽ何とかいふ歌を引例に……エヽ何とか……

と言ひかけー折から、娘のお德が二階に上り來り

お德「お父ッさん確か此うでございまーたよ……雪に野の美ーすぎて恐ろーや、下にいばらの針をかくせば……

市五「オヽ然う〳〵如何でも若いものは記臆が好いアハヽヽヽヽ然ーー何時の間に聞いてゐたのだ

お德「ハイ先刻チョット……

子分のお目出度が傍から口を出て

吉藏「ソコデ私が若旦那に、左樣なら、藤五郎は如何いふ思案でせう万

一此方等に安心させて置いて不意に夜討でも仕やうテ〜謀略でせうかと、お尋ね申〜たら、イヤ渠等も有名の俠客だから、マサカ其樣な卑怯な事もしまい余が仄かに聞いてゐるにハ、アノ藤五郎は落合の娘に懇想して、アレを手に入れたい考へからして……モシ此方の親分が兩勇双び立すで、平生自分と中の惡いのと且は落合へ出入をするので多分其事に故障をいふだらうといふ思ひ過しから、過日の晩の喧嘩も仕かけたのだといふ噂もあるから、今度の謝罪狀も何か其方の思慮から出たのかも知れねへが夫ならば余が喧嘩の腰押しに這入ッたを幸ひ、故意と事を棒大にして、落合までも連累にして、若も落合が迷惑をしたら、ソコに附込ンで娘の事を言ふ筈を此う存外に弱く出るとは如何も思案に能はねへが、何でも娘の因縁が含んでゐるに違へねへ然し先が此う事の判つた挨拶をして來たのに此方が乱暴な事も云へめへからヤッパリ温厚しい返答をして一旦事を納めて置いて尙も油斷なく敵の擧動を探つて臨機應變の掛引を仕なくッちやァならねへが、何でも彼を知り已を知らなくッちやァ戰爭は出來ねへから、此家の親分の子分の内で、目先きの早へ奴を間者に遣ッて、十分敵の摸樣を探ってくれと此ういひ置いてお歸り爲せへしたので、今親分と二人で其事の相談しながらお前の歸りを待てゐたのだ……

丑松は市五郎と吉藏が交る〳〵說く松本の意見を聞いて二階の階子段の傍に坐つてゐるお德を見返り

丑松「お德さんチョッと下を……

お德は上り口から下を見て

お德「下には誰も……

丑松は一段聲を低めて

丑松「親分も吉兄ィも聞いてくんヲエ、其事に就いて妙な事を聞いて來た、先刻落合さんから歸りに餘り暑いから、チョッと汗を拭いて行うと思つて、お吉の茶店へ飛込と、例の正直者の長太が居たので、愚弄ー半分種々な談話をーたら、彼奴小な聲をーて、田淵の先生が藤五郎の事に附いてお前の親分のとこへ行たらうと、思ひも寄らねへことを尋ねるので、如何ーて其樣な事を知てゐると聞いたら、二三日跡に落合樣のお居間のお庭の掃除をーてゐたら、旦那樣と俯庵さんと、密談閑話をーてゐてその俯庵さんの話の内に、貴君のお賴みの通り、程好く藤五郎を說諭けて漸く松本樣と市五郎親分に當て謝罪狀を贈るまでに、說附けたから、モウ御心配にやア及びやせんと云てゐたから夫で田淵さんが使ひに行たらうと考へてゐたのだと云て居やーたが藤五郎が穩便に出たのは全く落合の旦那のお取計ひでせう……

市五郎は丑松が此の注進を聞いてサテハ落合の旦那が平素御慈愛の厚いのと御分別の深いところから宮城の若樣の御身分と數にも足らぬ此の市五郎の身上をお案じ下すつて、内證で田淵に仲裁させて多分金で事をお濟せ爲すッたに違ひないと心の内に考へて、其恩義を謝すると共に最前宮城の言たる藤五郎が、お絹に懸想の事を想ひいだーー何か心に感情を動ーつ、傍に居る娘お德の顏をジッと見て

市五「フーン夫で藤五郎の謝罪狀の原因は大体判ッたが……落合の旦那が内證で此の喧嘩の仲裁をーて下すッたのゝ言ふ迄も無く松本樣と已の身を庇保ふて下さる爲めに違へねへが夫程にーて下さる旦那樣に如何ーて、御恩報じをーて好いか噫物態ねへ

と思はず涙を落す折から下より梅太の聲にて

「お德さんお客樣ですよ……

落合の閑室の中央に、宮城の松本は袴羽織を折目正しく坐を占め主人夫婦は少し隔りて下手に座を占め、三郎兵衛は兩手を膝に頭を垂れお繁は其處に泣伏したり、宮城の松本は扇を笏に取直し、忍やかなる聲に力を入れて

松本「貴君等が驚くのも尤もだし、又悲むのも尤もだが、今云ふた通り最愛の娘御の生命には換へられないと思つて拙者が一時の方便で取計つた次第だから貴君等も娘一人を失つたと思ふて潔く斷念めたが好い、此樣な次第に成り至つたのも、佛家の所謂前世の因緣だらうから……

と言ひつゝ、三郎兵衛の顏をヂット見れば落合は形を改めて

落合「此樣な次第とは存知も依らぬ事ですが、一旦貴卿にお任せ申した娘の身の上、今更何で否やを申しませう貴卿は勿論娘の爲めには生命の親殊に其僧も命に懸けてまで思ひ込むとはよくの因緣でございませう……

三郎兵衛は男の事なり一村の檢束もする身なれど豫て宮城に對して暫ひ〳〵言を重じて潔く言放ち飽まで迫ぐりくる涙を飲込みお繁の方を顧みると同時に松本はお繁の方に眼を向けて

松本「お繁どのそのお嘆きも御道理ぢやが、實に餘義無い次第ですから、潔くお斷念めなさッて……

お繁は松本の意外の相談に一時は氣を失ふまで驚きたれば、今尙半死半生の有樣にて精神も確かならねど、松本に此く言ひかけられければ涙に頰を濕し〳〵唇の色の變りたる顏をやう〳〵擡げて

お繁「預ての約束と云ひ三郎兵衛も只今のやうにお受けをいたしますからは何で妾に何に否やが……此間貴卿樣が娘を余に任せれば屹度病氣は癒してやると仰しやッて下さいま

た其時には、よもや如此な事とは存知ませんから、誠にお嬉しう思ひまして……病中の煩にも其事を申し聞けましたら、アレも、アレも、よく〳〵嬉しかつたと見えまして、幾日も笑つた事の無い顔へ嫣然笑を含んで、さも嬉しさうに、妾の顔を見まして、夫から後は彼程の大病が、不思議なやうに癒りましたのに、人も有うに、乞食仝様なそんな出家と……そんな出家の方へ嫁入らねばならんと聞きましたら其座で絶息つてすぐに死んでしまひませう、夫が悲愍で夫が可愛想で……

と云ふ詞さへ、迫ぐり來る熱き涙に遮られて、岩に堰る、山川の流れの音にさも似たり、松本は左視右視て落合の泣ぬ心の憂ひ、お繁の涙に咽ぶ胸の悲み彼を察し是を憐み吾知らず惆然たりしが心弱くては適はじと自ら勇氣を厲まして故意と言も爽かに

松本「御夫婦共早速の承諾で拙者も實に滿足いたした其お返事を承はつたので、惠鶴港主に金打までして擔任けた武士道が立つといふものだが、只今お繁どの、言に依て考へるに、お絹どの、此緣談の事は貴公等からは話し難からうから、今日にも明日にも時機を見て拙者から彼娘に程好く話して見て、彼娘の承諾を得た上は善は急げといふ事もあるから、早速婚姻の事を取計ひませう然し先方は一衣一鉢の行脚の僧、此方は一村の庄官の娘、家格と職務に對してマサカ此地で婚姻をさせる譯にも不可んから、拙者が媒妁役に二人を江戸へ連て行て自宅へは内々で然るべき處に家を持せ彼地で目出度く夫婦に玄て、惠鶴港主には髮を蓄へさせて、何か相當の稼業を營ませる事にするから、一二年の日子を送つて人の噂の薄らいだ時分に、夫婦共に此村へ呼歸すとも又都合に依て彼地で永く暮らさせるとも夫は後日の沙汰として差當り二人が江戸へ落着いたらば、貴公等が世間へ内

證で逢ひに行つて婚舅の名乘りを爲さるが宜しい……ソシテ婿とイヤ惠鶴菴主とお絹どの、旅の支度を……惠鶴菴主も婦人同伴で旅行をするのに、行脚の僧の形粧でも不都合だから絹か紋附の帷衣か單衣に羽織……イヤ〳〵惠鶴菴主の衣裳は拙者の着替を分れば宜しい、大小も拙者の不斷指しを貸す事にしやう、お絹どの、衣裳も、ホンの着替だけにして、其餘は駄荷にして跡から贈るが好いドウで世間を憚る者一人だけに限るから、迚も多くの荷は持て行けない

と、跡々の事まで相談すれど、三郎兵衛と只ハイ〳〵と答ふるのみ、お繁の涙に顏も擧ず此る折しも娘お絹がすさみにや彼方に當りて搔彈清き琴の音の幽に聞ゑて、其唱歌さへ情人との結婚を待わびがほなる島臺……

「ところ千代ませ島臺に、實に俱白髮尉と姥、常磐の蔭に、枝も榮る松と竹、鶴と龜とが舞遊ぶよろづ歡ぶふとぶきに、げにものどけき春の空……

お繁は三郎兵衛と思はず顏を見合せてねッと計りに泣入れば、松本は傍を向きつゝ、疊紙取出〳〵て鼻うちかみけり

第十七回

結納

源十「コウ今から醉ちやアいけねへぜ、己等達は此うして飲でゐるが可愛想に忠三茂を見や、花菱と和睦の一件から、晝夜二階住居で今日の樣な祝日でも、ヤッパリ閉籠つて骨牌計り翫弄て居らア

權次「夫も此の婚禮が濟むまでだといふから、數日の間の耐忍だ耐忍と言へば此の婚姻談話の程好く出來たのは全く親分が耐忍强くつて、彼晩の喧嘩に花を開かせなかつた所爲だ、シテ見ると、耐忍は實に貴重なものだなア

源十「フン、親分の忍耐も忍耐だが、一つは修庵老の盡力だ羽織の紐で

は無いが、諸事不佞の腦にあるから、マアお任せなさいなんテ氣障な臺飼を言やアがつて、覺束無へものだと思つてゐたら、ドコをドウ胡麻かーやアがつたか、結納とまで漕附けやアがつた、醫者は下手だが媒介口は餘程巧妙へと見えるアハヽヽヽ

權次「己ア尙、彼程評判の落合の娘を見た事が無へが熊兄ィの話ぢや素的なもんだと言ふぢやア無へか

源十「素的にも滅法界にも、田舍源氏の江戸繪にも如彼な美い女は書いて無へやア

權次「ヂヤア親分の惚れたのも尤もだな、汝の恍惚れてゐる花菱の娘とは如何だ

熊吉「ウフヽヽヽヽ、比較物にやアなら無へ、雪と墨と鼈と月ほど違はア

源十「マサカ夫程も違は無へけれども櫻と桃ぐれへは違ふだらう

權次「ヂヤア、素破お家の一大事といふ時にや、隨分御身代りには立つのかアハヽヽヽ

熊吉「ウフヽヽヽ源十め自分の惚れてるものだから、櫻と桃だと吐しやがる惚れた慾目は怖へものだウフヽヽヽ此方やア、色氣より食氣ィヤ飲氣だウフヽヽヽ

源十「ヤイ樗蒲皿、惡戲をするな角樽の酒に手を着けちやア不可無へ鰹節も親分に見せたのか

權次「今に田淵が例の鼻の先へ汗を溜めて藥罐頭を振立て取りに來るから、ソッと、ーておき無へ

熊吉「角樽へ手を着けたつて、跡で入れて置けば好いぢやア無へかべらぼうめ、此話の纏つたのは修庵の骨折計りぢやア無へ、半分はコヽ此の熊吉さんの……

源十「好いテに判つてゐるよ樗蒲皿も博奕にやア強いが酒にかヽる

と意氣地は無へなアオイ擺次、熊の野郎に搆はねへで、其品物を汚穢れ無へやうに片附けて置う……

會津の藤五郎が頃日より假の住居と定めをる鏡中條の上總屋の一室の内にて、子分の甲乙が集りて、今日は落合へ婚禮の結納を贈る當日なりとて前祝ひの小宴を催してゐるところへ、煤竹人の田淵修庵は此の婚儀を整へたる其勳功を鼻にかけて、平素さへ大きなる顔を一倍大きくして雪駄チャラ〳〵、扇子パチ〳〵、意氣揚々として入來り、いと花やかなる調子にて

修庵「イヤ今日はお目出度う、好男子の勢揃ひで、お祝ひですか親分はエヽ座敷で結髪月代モウ徐々めけこんでゐるのかナ、手廻りの好こと、ヤットの事で結納とまで漕附けたが、成丈け立派にして釣臺に乘せて、ハヽアンお定りの角樽に松魚節か、目錄は……

熊吉「オイ先生、落合へ運ぶだけの事だから、其樣に慌忙しなくつても

好からう、マア息つぎに一杯やんなせへ

修庵「オイ熊さんお前尚親分に聞かないのか、アノ一件を……

熊吉「何だ一件とは又紛紜でも……

修庵「エヽ延喜でも無へ紛紜なんテ……其樣な事ぢやア無へが、ソラ、此間も、アノ相摸屋の二階で子話したらう、落合の家は、痩ても枯ても代々の大庄官、好いかへ、幾許何と云ても親分は俠客、エヘヽヽヽダカラ、ソレ、丸段目のお石の臺詞では無いが、釣合はぬは不緣の基と云ふ事もあるので、落合の旦的も種々心配して、此方の親分とも彼是相談して、花菱とは和睦したとはいふものゝ彼の喧嘩の顚末もあるものだから、寧そ眞實の和解りの印に内證はマア兎も角も、表向きは、お絹さんを花菱の親分の娘と云ふ事にして、市五郎さんの内から、此處へ輿入れと話しが纏つたのだ、エ、好いか、判つたか、ソコデ、イヤ、ダカラ、今日の結納も勝沼花の

菱の内へ持て行くのだろう、チョイ行きの、チョイ歸りとはいかないのだエヘヽヽヽヽヽ

熊吉「ヂヤア、何かへ、落合の娘を花菱の娘にしてゝ……爾うすると市五郎親分が内の親分の舅に成る理窟だ……

修港「左樣……

源十は横合より口を出し

源十「ソコデ、お德坊を己の嫁にすりやア、花菱は己の爲めにも舅だア

權次「又始めやアからア、お德狂人め、アハヽヽヽヽ、田淵さん、ヂヤアなんぞは、其晩は内へはおけねへ、若花菱の目に懸つたら、孫ての約束だから、三人の首を取ると云だらう、サウなると、内の親分もウンと云ふめへ、巳等達も承知しねへ、忠三茂は尙の事だから、三々九度の嫁入の座敷は、すぐに修羅の衢で、盃の獸酬より生命の與奪が先へ始まるだらう、其樣な番狂せな事の出來ねへやうに今から忠三茂の隱しところを……

修港「イヤ〳〵其心配にやア、及ぶまい、今までなら兎も角此う談話が纏れば、双方も親類交際だから、マア早い話が、會津のイヤ此方の親分の子分は花菱の子分、市五郎さんの子分は會津の子分、好いか判つたか、就ちが一個缺けても、味方を一人減らす道理だから、滅多にそんな騷動の始まる氣遣ひはあるまい

修港と子分が頻りに談話してゐるところへ、藤五郎は平生の望み既に九分まで成就して最早結納の一段とまで成りければ、心祝ひに結髮月代をして衣服をも改め、滿面に歡びを溢つゝ、出來れば、修港は低き鼻をぴこつかせて

修港「親方お目出度う、少し道が張りますから御支度が好ればすぐに

御結納を……イヤ御立派な事で、媒妁の愚老も頗る鼻の高い譯で……イヤ是は愚老に御祝儀、毎度恐入つた次第で……實に御目出度いことで、愈々明晩は首尾好くお輿入で、差詰愚老が例の美聲で高砂やーをうなる役目か、エヘヘヘヘ成う事なら杵屋の三味線で愚老が得意の……さて婚禮の吉日は緣をさだんの日を撰み、贈る荷物は何々あるなと、例の種持三番を一番うなりたいものだ、エヘヘヘヘイヤ詰らん事を言て晩くなるといかん、何分遠いから、サア〳〵出かけませう源さん一寸祝つて燃火を……オット若衆、その竹杖は持て返るのでは無いよ、先方の門口で威勢好くポンと打ち折て歸るのだ、好いか、判つたか、ヂヤア親分後程……

藤五郎機嫌能く

藤五「御苦勞です酒の燗をして待てゐるから、成丈け早く歸つて來ねへ市五郎に好く言ておくんなせへ……

此時子分は切火打をして、一齊に掌を拍ち……

「お目出度う

第十八回

斷腸花

お松「お孃さん、お早いこと、お現金なこと、モウ洒然と御化粧を遊ばして、貴女、今朝程はさぞオホヽヽヽ

お絹「何が……

お松「マア眞面目なお顏を爲さいまして、オホヽヽヽお顏にうーれーしいと書いてございますオホヽヽヽ昨夜若旦那樣は今朝程貴女に何かお話を遊ばすお約束でばございませんかお浦山しいことオホヽヽヽ貴女と、若旦那樣とお二人でお話しを遊ばして入つしやるところは、恰是田舍源氏の錦繪の紫上さやらと、光氏樣のやうで、ございませうオホヽヽヽ

お絹「イヤなお松だこと、一人で笑つて許りゐて、若旦那樣がお話があると仰ーやつたつて、如何なお話だか知れもーないのにオホ、ゝゝゝ

お松「若旦那樣が直接に貴女にお話があると仰ーやるからには孰れ……オホ、ゝゝゝ

お絹はお松が揶揄る詞はうち消せども、戀には慣れぬ處女氣の包むにあまる嬉ーさを自然と色にあらはー、手に持る團扇にて皷動く心臟を抑へ震へる足にて強て庭下駄を踏占めつゝ、宮城の松本が居間と定まれる閑室の椽端近く立寄りて、袋簀障子の外面よりいと茫然げなる聲音にて

お絹「若旦那樣、尙お早うございますか……

と音問へば、内には敬次郎の眞之助が、今日こそ心の秘密をお絹にうちあけ已が意見に從はせんものと思へば、毎よりは早く起出て、衣服を改め袴をさへ着けてゐたるが、お絹の聲を聽くと均ーく、障子を開けて徐に立出で

宮城「オ、お絹さん、大層お早いこと、今日も快晴で然ー朝の間は風が有て、涼ーくて結構です、昨夕チョットお約束申ーた通り、今朝は……今朝は少し去貴嬢へ折入て御相談があるが……コウー

と此處では何だかウ運動ながら度の景色を見て、築山の蔭の茶室でお話を去ませう……

お絹はさも嬉げに

お絹「彼處は木の蔭で格別涼ーうございますから、夫に池の蓮も花盛りで格外宜ーうございませう、妾が其お煙草盆を……

宮城「ヂャア余ハ圓座を持て行きませう、お絹さん、今朝余とお話をすることに就いて、阿父さんも阿母さんも別に何にも……

お絹「イ、エ……

お絹は松本と連立て庭を歩みーが今朝は貞之助が常には増ーてうち解けたる様子に心の嬉ーさ譬へんに物もなく……いつまでもかくて變らぬものならば、言んかたなの人の心や……など或人の歌さへそゞろに思ひ出で、最早吾情人と偕老の約、同穴の契をも結びー心地ー平素は羨ーくも、嫉ーくも見られたる番ひ離れぬ池の鴛鴦も頭並べーー汀の蓮の花も、今朝は憐にも愛ーく見られ、籬に開ける朝顔は吾心の喜びを知りて笑み、梢に囀る雀は吾心の喜びを知りて祝ぐかと思はれ見るもの聞くもの、一つとーて娛ーからざるものなければうーろめたさも忘るゝまで、いそ〳〵とーて歩みを運びやがて大やかなる楓と老たる松に添ひて建設けたる、茶室の障子を開けて己が携へたる煙草盆を程好き處に置き松本が持たる圓座を間を計りて敷き設け

お絹「若旦那様此處は朝日が射ーませんから、宜ーうございます、サアお上り遊ばせ……

松本はお絹の云ふがまに〳〵上に登り設けの圓座に座を占めて莞爾笑ひ

宮城「今朝は暫時お話ーをーなければならぬが、宜からうねへ……

お絹は羞ーげに

お絹「ハイ妾は何時までもー……

松本は煙草袋を取出ーて、一服喫み、殿中扇を取上げて徐かに胸の邊りを扇ぎながら、お絹の顔をヂット眺め

宮城「アノお絹さん、此のお話は元來モウ、此間にいたさなければ成らないのだが、成るべく貴嬢が全快をーてからと思つてツイツイ今日まで言遅れたが、昨今は貴嬢の身体も、モウ平常に復ーたやうだから……然ー貴嬢も知てゞ有うが、孫て御兩親は貴嬢の身体は余に任せるといふお約束だが、肝心當人の貴嬢に否やがあると、余の丹精も無になるが、貴嬢と平素親孝行だから御兩親

の仰せなら何に寄らずお背きではあるまい〜又余の言ふことも聽いておくれだらうね〜……

お絹は松本の言に深長なる意味のあらんとは固より、測知るべくもあらねば、只偏に……言〜がらむ唐糸の解くに解れぬ下心……戀といふ謎にこそと想像りて

お絹「ハイ……決〜て

と答〜のみ耻〜さと嬉〜さに心を充されて、持たる團扇に顔を掩ふて

さ〜俯首けば、宮城は僅にお絹の赤根さす、耳と紫なす島田の髷を見るのみにて、是も亦うの意中の如何を計りかねて

宮城「余が嚴格しい事を云ふので、又逆上るのでは無いか、逆上るならば俯首いてゐては、尚不可よ、エ、お絹さん

お絹「ハイ、イヽエ、向ふの樫の薬へさす、日の反射で少〜まぶ〜うございますので……アノ若旦那様、豫て兩親からも汝の大病の癒つたのは、全く若旦那様のお蔭で言はゞ生命の親で入つ〜やるから、その御恩報じに若旦那様が、如何いふ、イヱ、アノ若旦那様の仰〜やる事は、何事でも、否やを言ふ事はならぬと、堅く申〜聞けられてをります〜、アノ……妾も貴卿の……貴卿の御恩は能う存知てをりますから、妾の身に適ひますことなら、何様な事でも、決〜て否やは申〜ませんから、ドウゾ御遠慮遊ばさらないで……

といふも漸く口の内、一半は松本の想像に任ずるもの、如く、團扇の骨を數ふるともなく、數へてゐる、その容姿の稚態さ、其所作の可愛ら〜さ、松本は今更愛隣の情遣る方なく曾時見惚てゐたるが、心弱くては適はじと吾から勇氣をいだ〜て、聊か形と言を改め

宮城「又例の嚴格い事を言ふやうだが、貴孃の今の、返事を聞いて余も滿足に思ふから話〜て見るが……人の思ひ人の念といふも

のは實に恐いもので、近い譬が恰是余が、ドウゾ一て貴嬢の病氣を癒一て上げやうと、一心に思つた念が屆いて、貴嬢の大病が癒つたといふやうなもので、夫から推一て考へると余は貴嬢の大病を癒一た程執念の深い人間だから、事に因れば又貴嬢を大病にする事も出來るといふやうなもの、ヤ如此な事を言たら貴嬢は余を大層執念深い人間だとお思ひだらうが、余が今貴嬢に談す話は、重大な事で貴嬢の家の爲め、貴嬢の兩親の爲め、貴嬢の身体の爲め、實に容易ならない次第だから、余が一旦口外一た上は、是が非でも聽いて貰はなければならないから、能く氣を落着けて、其氣で聽いておくれ……お絹さん、變な事を聞くやうだが、此春余が江戸から土産に持て來て上げた、亂菊の銀釵、アレを貴嬢ドウなすつた……

お絹は最前より身動きもせず、息もせず、一心不亂に松本の言を聞てゐたるが今此の意外の一問に手に持る團扇の落るも知らず、思はず貞之助の顔を熟視めけり。宮城の松本もお絹の顔をヂッと見て尙も語を繼ぎ、

宮城「お絹さん、アノ銀釵の事に就いて、お話もありお賴みもあるのだから、ドウゾ眞實に話一て下さい……

お絹は銀釵の事を問はるゝさへ不審一きに、夫に就きて話と賴みさへ有りと云ふに、愈ヶ怪訝の念を添へ、彼人が折角心を籠めて賜ハりたる土産の品を無斷に人に遣りたれば夫を咎め玉ふかさるにても賴みとハ何事にか、歷ヶの御武士が女に賴みとは……と兎や角と思ひかねつゝも此く眞顏なる事を仰せらるれど、其實は妾と同じ思ひにて、將來の事を契り玉ふ御心ならめと、漠に吾方にィナ己が心に引附けて……

お絹「ハィ貴卿には誠にすみませんが……此春母と一緒に石和の親類へまゐりまー たが用事の都合で母は後に殘りまー て妾だ

け先へお松を伴に連れて歸りまーたが、鏡中條村と此村との中央ごろでフト葬式に邂逅まーて道を避けてをります内、その葬式の伴に立た人と、通りかゝつた托鉢の御出家と間違が出來まーて、人足やら會葬者が多勢かゝつてゝの御出家を手籠にしやうとするので、あまりお氣の毒に思ひまーたから、女子の唐突とは存知まーたが、その双方の中へ這入りまーて、御出家の難儀を救ふて上げまーたが、其時御出家は報謝の爲だと仰ーやつて叮嚀に回向をーて下すつたので……

と言ひつゝ、更に貞之助の面をチョッと見て赧然と顔を紅らめ……

「アノ……諸願成就二世安樂の爲に……他に何も持合せがございませんなんだので……ツイ彼の銀釵をお布施に進ぜまーたが、今ではアノ……今では誠に惜いことをイヽエ惡い事をーたと思つて、後悔ーてをりますので……

松本は悄然とーて

宮城「アヽその善根が却て惡緣に成たのですその銀釵が貴女の病氣の根に成たのです……」

お絹は益々眩き、愈々疑ひ、今まで腦裡に充盈されたる戀慕の念は少ーく空虛を生じ其間隙へ怪訝の心を注入れつゝ

お絹「エ、若且那樣、夫は貴卿何を……」

松本は頻りに目を皺め

宮城「余が貴女に話のあるといふも其事だから、賴のあるといふも其事だから、能く氣を落着て聞いておくれ、貴女は平生經宗の信者で佛法の大意にも通じ、因果の道理も諦め、又極めて親孝行であるから余の話も余の賴も濕多に聞違へるやうな事はあるまが、若聞違へるとイヤ否やがあると貴女の命は固より、貴女の親の命物數では無いが此くいふ貞之助の命……尙其他に一

個の人の命に係はるので實に一家内と二個の他人が大不幸に陷る次第だから返す〳〵も心得違ひの無いやうに……

お絹の腦裏は尚戀慕と怪訝の鬪爭の最中なれば、松本が善根が惡緣に成たのですの冒頭の一語、に就いてはさ〳〵て感覺を動かさず只余の話と賴みを聞かないと自分等親子三人の外に二人の他人合せて五人の命にも係はるの語に向つて種々の想像を廻らし、最前のお話に人の思ひは怖いものだと、仰〳〵やり又自分の執念深い事を言てゞ有たが豫て自分の丹精で此身の病氣を癒〳〵たら此身を自分に任〳〵てくれと兩親に堅い約束を爲られたる由なれば、若や此身がお賴、イヤお意に隨がはぬ時は此身と兩親とお松をも合〳〵て、佩刀の錆とゝたまひ其上にて自分も御切腹の御決心にやと再び又怪訝は戀慕に勝を制せられて不整なる此身を左までに想ひ玉ふか、世にも難有き事の限りにこそと自ら愧ぢ自ら喜びて感涙に膝を濕〳〵さも熱心なる調子にて

お絹「命の御恩を受けた貴卿の仰せ何で否やを申〳〵ませう平素信仰〳〵てをります高祖大菩薩でも、鎭守の八幡樣でも誓約に立てまして決〳〵て虛言は申〳〵ませんからドウゾ御遠慮なく仰〳〵やいまして……

と言ひつゝ俯首く其顏を松本はうち眺め……他に仔細有てせ〳〵病氣の介抱とは知らず、此までに余が心切を歡ぶとは實に悲慨の者にこそ、今云〳〵と余が心の意見を明〳〵なば、さぞや驚ろん、さぞや嘆かんと今更哀憐の情に耐兼て暫時は言ひいでかね〳〵が此くては果じと思ひ直し〳〵千均より重き舌を强て動かし〳〵

宮城「余が話といふは、余が願みと云ふは何を隱さう實は……先夜月に浮れて散歩せるついで落葉山に登り、不識庵主惠鶴に邂逅して、閑らずも彼の病根のお絹に在る事を知り、お絹の命を助けたさに、彼を飲諭〳〵獨斷にて結婚を約せ〳〵事を始め、食物を運びて彼の疾病を癒

ー、又お絹の一身を委任せらるゝ事を三郎兵衛夫婦に約束ーて、お絹の介抱をーたる事より、お絹の全快を待て婚儀の事を三郎兵衛夫婦に談じ、自分が媒介人にたちて二人を東京へ護送し、彼地にて夫婦にする事まで談話を纏めたる事を話し、お絹の承諾を得次第、今日にも明日にも其事を實行する旨を明ー……若お絹が此事を諾はねば、彼の執念深き惠鶴が再度想思病に罹り、隨てお絹も元の難病に陷り、遂に兩人とも非命の死を遂るは必定、最愛の娘にかゝる非命の死を遂げさせたる三郎兵衛夫婦は悲哀の爲めに身を損ねて是も長生は致すまじ、惠鶴に金打までーて、結婚の事を約せー、自分は武士道が立ねば、割腹ーて死ぬるの他は無ー、左すれば貴女の心ひとつで自他の大不幸を來す理由なれば、己の爲め、親の爲め、他人の爲め、是も宿世の因果と諦めて、余の意見に就いて惠鶴と夫婦になりてよと言を盡ーて諭ーければ、お絹は始終を聞いて其意外に駭き、思はず眼を閉ぢ唇を結び、其目に涙を浮べ、其唇に震へを視ー、顔の色さへ著白めてやゝ暫く、默然たるが、素より孝心深く、理義に賢く、因果の理にさへ通じたれば、非常の失望と非常の悲哀と非常の落膽を浴から思ひ返ーて、吾身ひとつはさもあらばあれ、兩親の爲め、大恩ある情人の爲め、此身を色中の餓鬼の犧牲に備ふべー、是も宿世の因果にてそと、心ひとつに諦めー、さすが戀慕の心のさりやらねば涙の目にて松本の顔を熟視め

お絹「アノ……若且那樣、貴君のお說諭は、ヨ能く判りました、ウ、うの惠鶴とやらと、屹度、屹度、婚姻イ、致ーます……

と云ひつゝ顔に手を當てそのまゝ其處へ泣き伏ーけり

第十九回　玉手箱

上總屋の臺所には、會津の藤五郎が、今宵落合の娘お絹と結婚の式を擧ぐるにつき、立働きをる下婢等が杯盤を片附けながら

お松「お竹さん、奥はモウ色直ーのお盃だのに男同士といふものは氣

樂なもので、肝心親御の代りに附て來た丑松さんを始め、其他の子分衆も、婚禮の坐敷に荒男が居たつて仕方が無いと言つて、内の親分の差圖次第に悉皆相摸屋の方へ行て仕舞つて……

お竹「其段は内の子分衆も同じ事で媒妁人も待女郎も何も彼も脩菴さんに任せて、花菱の子分衆の接待だと言て自分達が先へ飲で今頃はサゾ圖武六、圖武六に成てゐるでせう

お梅「サア喧嘩の時には役に立つでせうが、如此な時には、男は幾個ゐても何にもならないから、花菱の親分の名代に、娘の事でもあるから、お德さんが附い來れば好いのに、お嬢樣お一人で、サゾ、オボ、、、、モウお嬢さんぢやない、お嫁さんだつけ……お嬢さんが、お嫁さんになるのは當然だが、明日から姉御にお成りなさるかと、思ふと何だかお可愛想で……

お松「眞正に爾うだねへ……

お竹「談話は違ふがお嫁さんの提燈持に來た花菱の子分の糸鬢とかいふ小僧は、容貌から衣裳から、總て氣が利いて居て、丸で舞踊のお温習の芝翫奴ソックリで、お嬢さんの、イエ、花嫁さんのお駕籠が玄關へテンと横附きに附いて轎夫が垂簾を揚げるトタンにアノ糸鬢がお嬢さんの手を採て引出した工合なぞは感心に樣子が好つたよ

お梅「マア大層賞ること、幾等氣を採ても、未仕方が無いよオホ、、、、

お松「オホ、、、、お梅さん、すぐ其方へ氣を廻して、否だねへ

お竹「男は當つて碎けろといふが、此方の親分も親分だが、花菱の親分も親分で、先度の喧嘩の中直りを兼て、落合のお嬢さんの假親に成て、今度の婚姻を取結んで幾末長く親類交際をするとは實に洒落してゐるねへ、實に目出度いねへ

お梅「目出度いといへば、有卦に入てゐるのは、田淵さんだねへ、内の親

分からも落合の旦那からも、加之に花菱の親分からも、三方から御祝儀を貰つて……

お松「その故かーて、空屋の戎子さんも宜ーくといふやうに、只さへ肥つた顔を格別膨脹ーて、矢鱈にニコ〳〵ーて……

お竹「貞といへば、アノ落合のお嬢さんは、評判の御容貌好ーだが、その眞白なお貞へ眞赤に口紅を着て、眞黑に齒を染めた處は、サゾーお美ーからう、早く帽子を取たお貞が見たいものだ……

お松「モウ色直ーだから、お取りに成たらう……

お梅「然ういふと、此方の親分に惡いが、モシ如此な稼業の内へ假親を立て嫁入をするので無くつて、ヤツパリ同じやうな庄官樣とか、又は大百姓へお嫁入をなさるのだつたら、サゾ立派な事ッだらうに子へ、お松さん

お松「アヽ、然ーー今夜はホンノ内祝言で、いづれ花菱の親分の病氣が全快次第に眞正の祝言があるといふから、其時は孰らも有名の俠客だから、立派な華美な婚禮があるだらう……

お梅「モウ色直ーのお盃がすんでお床入の一段だらうからソット行てお顔を見て來やうか

お松「お止ーく〳〵、透見だの側聽だのするものぢやないよ、夫に親分がアノ通りの氣象だからモシ見附つてごらん夫こそ如何に叱られるか、万一とすると刃物三昧が始まるかも知れないから……

と頻りに話ーてゐる折ーも奥の方に當りて俄かに騒ーく、藤五郎の罵る聲、脩庵の號く聲、花嫁の叫ぶ聲の聞ゆると共に障子襖を踏倒す音の響きて、聲を厥立て此方へ驅來れば、コハ何事と三人の女は其方を屹度眺むる間も無く、眞先へ遁來るは田淵脩庵なり、引續きて逐驅來るは會津の藤五郎なり、霞小紋の上下の上を刎除け一刀の鞘を拂つて上段に振りかざー

藤五「ウヌ修庵の虚言家め、能くも藤五郎の顔に泥を塗つたな約束通り水瓜頭を貰ふから覺悟ーろ……

スワヤ一刀のもとに斬捨んとするトダンに走出たる花嫁が大膽にも藤五郎を背後より確と抱き

花嫁「モシ修庵さんに罪はございません斫るなら何卒妾を斫て妾は此處へ嫁入するからは、命は元より覺悟で參りまーた……コレ田淵さん早くお逃なさい、サア殺すなら此妾から

と力に任せて引留めたり、修庵は會津の藤五郎が振上げたる刀の下に聲震はー

田淵「親分御尤だ落合のお嬢さんが花菱の娘と變つたのだから、腹も立てなさる筈だが愚老は實に知らない事で是には何ぞ仔細が……

お德は修庵と藤五郎の間へ其身を入れて端ーく座を搆へ、藤五郎の顔を屹度見て沈着たる調子にて

お德「藤五郎さん、サゾお腹も立ちませうが、落合のお嬢樣は少ー仔細が有て、到底も親分の處へ嫁く理には不可ないので、落合の旦那と、内の阿爺が相談ーて、銀の代りに鉛には違ひありませんが、此うーて妾がお身代りに參つたので元よりお氣には入りますまいが、萬望不勝ーて妾を女房に持て下さい夫とも達てと仰ーやるなら、據ろない理ですから、妾の首を切て、お前の貞を立て、お嬢さんの事は綺麗に斷念めて、ソシテ修庵さんは少ーも知らない事ですから、万望勘辨ーて上げておくれなさい……

白刃の下に座ーて少ーも怖るゝ色無く、斷然言出ーたるお德の膽力に藤五郎は少ーく氣を奪はれ、怒りー眼にてお德の貞を見つめ暫時躊躇せるが、修庵は此處ぞと震へる聲に力を入れて

田淵「今お德さんの云ふ通り、今夜の事は何にも知らないので、最前花